

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第1集

山梨県韮崎市

久保屋敷遺跡発掘調査報告書

1984. 3

山梨県教育委員会

山梨県韮崎市

久保屋敷遺跡発掘調査報告書

1984. 3

山梨県教育委員会

序

韮崎市内には、国指定史跡の新府城跡をはじめ、縄文時代の集落址として全国的にも知られている坂井遺跡など数多くの遺跡が存在しております。しかし今まで発掘調査されてきましたのはもっぱら釜無川以北の地域だけでした。この度、県道北原下条南割線の改良工事に伴って久保屋敷遺跡が発掘調査されましたことは、多大な成果を得ると共に、釜無川以南の河岸段丘上の遺跡に、初めて組織的調査のメスがいれられたという点でも画期的な意義があります。

この久保屋敷遺跡では、縄文時代早期から中期、弥生時代中期、古墳時代前期と非常に長い時代にわたっての遺構・遺物が発見されましたが、とくに注目に値するのは、古墳時代前期の住居址とその出土遺物です。同期のものとしては、県下で最も古い段階に属するといわれており、先に韮崎市教育委員会によって調査され、ほぼ同時期の遺構・遺物が多数発掘されました坂井南遺跡と共に、この地域における古墳時代初頭の人々の生活様式を知る上での貴重な史料となることが期待されております。

なお調査にあたられた調査員、作業員の皆様をはじめ、終始調査にご協力いただいた地元の若尾・北原両区の皆様に厚く御礼申し上げます。

1984年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本書は、山梨県韮崎市旭町上条北割に所在する久保屋敷遺跡の調査報告である。調査地は韮崎市旭町上条北割字久保屋敷440-1他、同字金山908他である。
2. 本調査は山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本書は調査担当者米田明訓、保坂康夫が分担執筆し、その文責を文末に明記した。写真撮影は調査員塙原明生が行なった。編集は米田が行なった。
4. 発掘調査に参加していただいた方は下記のとおりである。

飯野幸一、飯野たみよ、石川博淑、井上義彦、上田磨智子、内田裕一、岡田牧子、小笠原祐子、乙黒早苗、弦間文代、三枝常義、佐野正美、志村好美、鈴木一子、塙原明生、強矢明子、東条晃嗣、永井由美子、中村誠、根岸位枝、野口きのえ、花輪竹治、横内翠
5. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々から御協力、御助言を賜った。厚く御礼申し上げます。

岡本範之、佐野勝広、鈴木吉二、鈴木正臣、根岸万之、日向千恵、深沢祐三、山下孝司、山路恭之助

凡　　例

1. 挿図の縮尺は次のとおりである。

住居址1/60、土塙1/20、1/30、1/40の3種、溝は不統一、埋設土器1/20、繩文土器(一括)1/6、土師器(一括)1/3、拓本類1/3、土偶2/3、石器1/3と2/3、石塔1/6
2. 造構挿図内のレベルポイントは、一箇面上で同一レベルを示すのみであり、全体としては統一していない。
3. 造構内造物出土状態挿図の中の造物番号は、同造構出土造物挿図の番号と同一である。

目 次

序	
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法と経過	1
第2章 遺跡概観	3
第1節 久保屋敷遺跡の立地と環境	3
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 層序	7
第3章 遺構	8
第1節 住居址	8
第2節 土塀	12
第3節 溝	15
第4節 埋設土器	19
第4章 遺物	21
第1節 土器	21
第2節 土偶	30
第3節 石器	30
第4節 石塔	33
第5章 まとめ	36
第1節 繩文時代の遺構と遺物	36
第2節 古墳時代前期の遺構と遺物	36

図版目次

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 図版1 (1)久保屋敷遺跡南側 (北方より) | (2)石列 (南方より) |
| (2)久保屋敷遺跡北側 (南方より) | 図版13 (1)6号溝 (南方より) |
| 図版2 (1)遺跡南側造構確認状態 | (2)6号溝 (北方より) |
| (2)1号住居址発掘風景 | 図版14 (1)1号埋設土器埋設状態 |
| 図版3 (1)1号住居址遺物出土状態 | (2)2号埋設土器埋設状態 |
| (2)1号住居址遺物出土状態 | 図版15 (1)1号住居址出土土器 (縹) |
| 図版4 (1)1号住居址 (南方より) | (2)1号住居址出土土器 (高杯) |
| (2)1号住居址土堤状遺構と方形窓穴 | 図版16 (1)1号住居址出土土器 (蓋) |
| 図版5 (1)2号住居址 (南方より) | (2)1号住居址出土土器 (S字口縹縷) |
| (2)3号住居址 (南方より) | (3)1号住居址出土土器 (S字口縹縷) |
| 図版6 (1)4号住居址 (北方より) | 図版17 (1)1号住居址出土土器 (小型縹) |
| (2)4号住居址遺物出土状態 | (2)1号住居址出土土器 (高杯) |
| 図版7 (1)1号土塙 (北方より) | (3)4号住居址出土土器 (S字口縹縷) |
| (2)2号土塙 (東方より) | 図版18 (1)4号住居址出土土器 (蓋) |
| 図版8 (1)3号土塙 (西方より) | (2)4号住居址出土土器 (高杯) |
| (2)3号土塙遺物出土状態 | 図版19 (1)1号土塙出土土器 |
| 図版9 (1)4号土塙 (東方より) | (2)3号土塙出土土器 |
| (2)5号土塙 (西方より) | 図版20 (1)5号土塙出土土器 |
| 図版10 (1)5号土塙遺物出土状態 | (2)5号土塙出土土器 |
| (2)6号土塙 (南方より) | 図版21 (1)1号埋設土器 |
| 図版11 (1)1号溝 (南方より) | (2)2号埋設土器 |
| (2)1号溝 (北方より) | 図版22 (1)5号土塙出土土器 |
| (3)1号溝打製石斧出土状態 | (2)石器 |
| 図版12 (1)4号溝と石列 (西方より) | 図版23 4号溝出土石塔 |

挿図目次

第1図 久保屋敷道路と周辺の主要道路(1/25000) ... 2	第20図 2号埋設土器(1/20) 19
第2図 久保屋敷道路全体図(1/500) 5 ~ 6	第21図 1号住居址出土土器(1)(1/3) 22
第3図 1号住居址(1/60) 8	第22図 1号住居址出土土器(2)(1/3) 23
第4図 1号住居址遺物出土状態(1/60) 9	第23図 2号住居址出土土器(1/3) 24
第5図 2号住居址(1/60) 10	第24図 3号住居址出土土器(1/3) 25
第6図 3号住居址(1/60) 10	第25図 4号住居址出土土器(1/3) 25
第7図 4号住居址(1/60) 11	第26図 1号土坑出土土器(1/3) 26
第8図 4号住居址遺物出土状態(1/60) 11	第27図 2号土坑出土土器(1/3) 26
第9図 1号土塙(1/20) 13	第28図 3号土塙出土土器(1/6) 26
第10図 2号土塙(1/40) 13	第29図 4号土塙出土土器(1/6, 1/3) 27
第11図 3号土塙(1/20) 13	第30図 5号土塙出土土器(1)(1/6) 28
第12図 4号土塙(1/30) 14	第31図 5号土塙出土土器(2)(1/3) 29
第13図 5号土塙と同遺物出土状態(1/30) 15	第32図 1号溝出土土器(1/3) 29
第14図 6号土塙(1/40) 16	第33図 2号埋設土器(1/6) 30
第15図 1号溝(1/120) 16	第34図 表面採集土器(1/3) 30
第16図 2号・3号・4号・5号溝(1/160) 17	第35図 5号土塙出土土器(2/3) 30
第17図 4号溝と石列(1/60) 17	第36図 石器(1)(1/3) 31
第18図 6号溝(1/80) 18	第37図 石器(2)(2/3) 32
第19図 1号埋設土器(1/20) 19	第38図 石塔(1/6) 34

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

県道北原下条南割線は、国道52号線と甘利山方面とを結ぶ重要な生活道路である。車の交通量も比較的多く、同時に地元旭町若尾、北原両区の児童たちにとっても、大草小学校への毎日の通学路として不可欠な道となっている。しかしこの道には歩道が整備されていないばかりでなく、一部に地形に沿って大きくカーブして見通しのきかない場所も存在しており、かなり危険な道と言われていた。県土木部は、児童たちの通学に必要な範囲には歩道を整備し、カーブの急な個所は道を直線化する計画を立てた。その計画は昭和58年2月に県土木部より県教育委員会に通知され、県教育委員会より文化財有無の確認の依頼を受けた県埋蔵文化財センターは直ちに現地へ赴いた。その結果、道を直線化する部分に繩文～古墳時代にかけての土器片の散布を確認し、遺跡である旨を県教育委員会に報告した。以後、県教育委員会と県土木部は協議をかね、道を直線化する部分に限って、県埋蔵文化財センターが緊急調査を実施することとなった。遺跡名は現地の小字名より「久保屋敷遺跡」と命名した。

第2節 調査方法と経過

調査は昭和58年8月8日より開始し、10月15日に終了した。調査面積は約2300m²である。調査にあたっては、予定面積の2300m²全域の表土を取り除き、遺構の有無を確認することとした。

出土遺物の記録・取り上げは次のような手順で行なった。

1. 表土除去から遺構確認までは、一括出土遺物を除いてグリッド単位で取り上げる。
2. 遺構確認後は、セクションベルトを設定し、それ以外の部分を床面まで掘り下げる。
その際、完形あるいは完形に近い土器や石器は残し、遺構全体における遺物出土状態を記録して取り上げる。それ以外の細片は遺構覆土出土として取り上げる。
3. セクションベルトの土層を記録後に、ベルトも上記の2と同様に掘り下げて遺物の記録を行なう。

(米田)



第1図 久保屋敷遺跡と周辺の主要遺跡 (1/25000)

第2章 遺跡概観

第1節 久保屋敷遺跡の立地と環境

久保屋敷遺跡は、蘿崎市旭町大字上条北割字久保屋敷および金山に所在する。発掘範囲は久保屋敷および金山の両小字にかかるが、久保屋敷部分の面積がやや多いこと、すでに金山の小字名を冠した遺跡があることにより、久保屋敷遺跡と命名した。

久保屋敷遺跡は、釜無川右岸の段丘崖線の肩部に立地する。遺跡のすぐ東側には、比高20mほどの段丘崖線が切り立ち、木立が茂る。そこを下るともう一段低い段丘がある。さらに下ると釜無川の氾濫原に至る。遺跡の北部は、比高5mほどのコブ状の小丘である。発掘区は、この小丘の頂部東側の斜面から、南側にある次の小丘との間の鞍部にかけての部分に位置する。遺跡の西側はゆるやかに南西方へ傾斜し、500mほどで御坊沢のせせらぎに至る。遺跡周辺は現在桑畠として利用され水はけがよく乾燥しているが、すぐ西側には水田が広がっている。現在水田になっている部分は古くは低湿地状を呈していた可能性がある。本遺跡が営まれた弥生時代や古墳時代に、こうした地域に水田を営むことも可能であつただろう。また、遺跡の近くには、段丘崖線の中ほどからの湧水もあり、水の便が非常によかったものと想しうる。

久保屋敷遺跡の立地する台地は、竜岡台地とよばれている。北は鉢物師屋付近から南は下条南割までの南北約3km、東西約3kmの三角形を呈する台地である。北側には甘利沢によつて形成された小扇状地があり、南側には巨大な御動使川扇状地が位置する。台地上の微地形は、御坊沢を境に西半と東半とで様相を異にする。西半は旭山の山麓線からゆるやかに東方へ傾斜する地域である。一方、東半は非常に起伏に富んでいて、全体としては南方へ傾斜する。台地上の遺跡の立地をみると、繩文時代や弥生時代の遺跡は、現在のところ起伏に富んだ東半部でのみ確認されている。旭山から流れだす水流は、竜岡台地西半部を東方に流下し御坊沢に入る。御坊沢は東半部に入ることなく南に流下して御動使川に至る。洪水などの出水時は、東半部に害が少いようにも思える。また、東半部には現在水田として利用されているような低湿地と、桑畠の営まれる乾燥した小丘があり、遺跡の立地や生業活動の面で西半部より有利であったのであろう。

⁽¹⁾ ところで、山梨県地質誌によると、竜岡台地から北の小武川に至る地域は蘿崎段丘とよばれる低位段丘とされている。先述したように竜岡台地には上下二段の段丘面を認めうる。下段の段丘の崖線を国土地理院の1/25000の地形図で追うと、ちょうど本遺跡の東側付近からはじまり釜無川に沿って小武川右岸の上円井まで続く。一方、上段の崖線は竜岡台地に限られる。竜岡台地では、傾斜が南方向であること、御坊沢のように南へ流下する河川があるこ

と、特に東半部は起伏に富み開析が進んでいることなど下段の段丘と様相を異にする。さらに本遺跡では、2mほどのローム層と白色粘土を伴う黄色バミス層が確認された。また、蘿崎泥流の存在も知られている。さらに、七里ヶ岩台地からの断面形を観察すると、その上面はほぼ連続するよう見える。こうした点からして、現世に形成されたとされる低位段丘に竜岡台地を分類することに不安感をいだかずにはいられない。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、縄文時代から中世の館跡まで多数の遺跡が存在する。竜岡台地にかぎってみると、本遺跡の他、縄文時代早期の茅山式土器が表面採集された大石遺跡、縄文時代と弥生時代の土器、石器類が採集されている金山遺跡、築地遺跡、羽根前遺跡、下馬城遺跡、長塚道下遺跡が知られている。これらの遺跡はいずれも先述した竜岡台地東半部に立地している。古墳時代の遺跡は久保屋敷遺跡の他は知られていないが、東芝ダンガロイ工場の裏手にかけて豊穴式石室をもつ古墳があったといわれている。昭和の初期に開発の手が加えられ、その折出土したという鉄鉢1本と太刀2本、石室用材の一部の扁平な割り石を所有する人もいる。

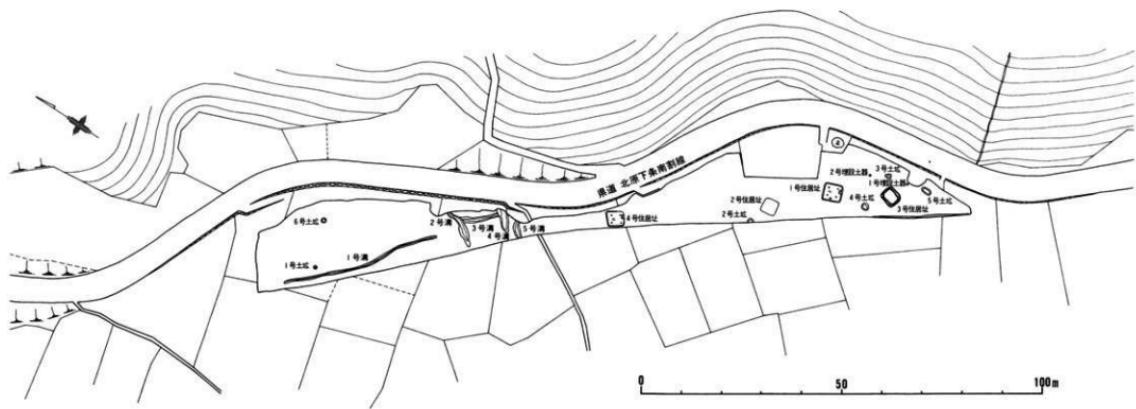
古代末から中世にかけては、竜岡台地周辺に甘利荘の存在が想定されている。また、こうした荘園を根城とした中世武士団の館跡もいくつか知られている。竜岡台地の北方、蘿崎市神山町武田には、甲斐武田氏の祖となった武田信義の館跡⁽²⁾がある。また、同町鍋山には、その要害城であったという白山城⁽³⁾がある。甘利沢扇状地の一角には、甘利氏館跡⁽⁴⁾がある。甘利氏は、信義の孫にあたる一条行忠を祖とするといわれる。現在、大輪寺の境内となっているが、土壘や堀の跡が残っている。竜岡台地の東南部、旭町南之割字山寺には、武川衆の一員である山寺氏の屋敷⁽⁵⁾があるといわれている。

竜岡台地から離れ釜無川を渡って北方に目をやると、塩川右岸の低地上に遺跡が密集していることに気付く。縄文時代中期・後期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の遺跡である。このうち北下条遺跡は、昭和57年に蘿崎市教育委員会によって発掘調査され、弥生時代から奈良、平安時代の住居址10軒が検出された。⁽⁶⁾

七里ヶ岩台地上には、有名な坂井遺跡がある。志村龍藏氏の情熱的な発掘により、炉址12カ所、住居址2軒を検出した。縄文時代前期・中期・晚期、弥生時代、古墳時代の遺物が出土している。また、坂井遺跡のすぐ南側には、坂井南遺跡がある。昭和57年と昭和58年に蘿崎市教育委員会によって調査され、縄文時代中期の住居址1軒、古墳時代の住居址17軒、平安時代の住居址7軒、方形周構墓4基の他、掘立柱建物址や配石造構、土塙、溝等を検出している。坂井南遺跡は、久保屋敷遺跡と同様に古墳時代初頭の住居址群が検出されており、両遺跡の関連が注目される。

なお、第1図中に示した遺跡の内訳は、以下のとくである。

1. 坂井遺跡（縄文時代前・中・晚期、弥生時代、古墳時代）



第2図 久保星道道路全体図 (1/500)

2. 坂井南遺跡（繩文時代中期、古墳時代）
3. 後田遺跡（繩文時代中期）
4. 前田遺跡（弥生時代）
5. 北下条遺跡（繩文時代中期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代）
6. 殿田遺跡（繩文時代中・後期、弥生時代）
7. 南下条遺跡（繩文時代、奈良時代、平安時代）
8. 金山遺跡（繩文時代、弥生時代）
9. 久保屋敷遺跡（繩文時代早・前・中期、弥生時代、古墳時代）
10. 大石遺跡（繩文時代早期）
11. 武田信義館跡（中世）
12. 甘利氏館跡（中世）

第3節 層序

久保屋敷遺跡では、耕作土を除去するとすぐにローム層が露出する。2号住居址のすぐ北側を深掘したところ、ローム層は約2m。その直下には上面に白色粘土を伴う黄色バミス層があり、白色粘土上面で水が湧出した。

検出された構造は、上方がかなり削り取られているもようであり、表土やローム層上面はかなり失われているものと思われる。(保坂)

〈注〉

- (1) 山梨県地質図編纂委員会1970「山梨県地質誌」山梨県
- (2)～(5) 田代孝他1980「日本城郭大系 8 長野・山梨」新人物往来社
- (6) 志村澁藏1965「坂井」

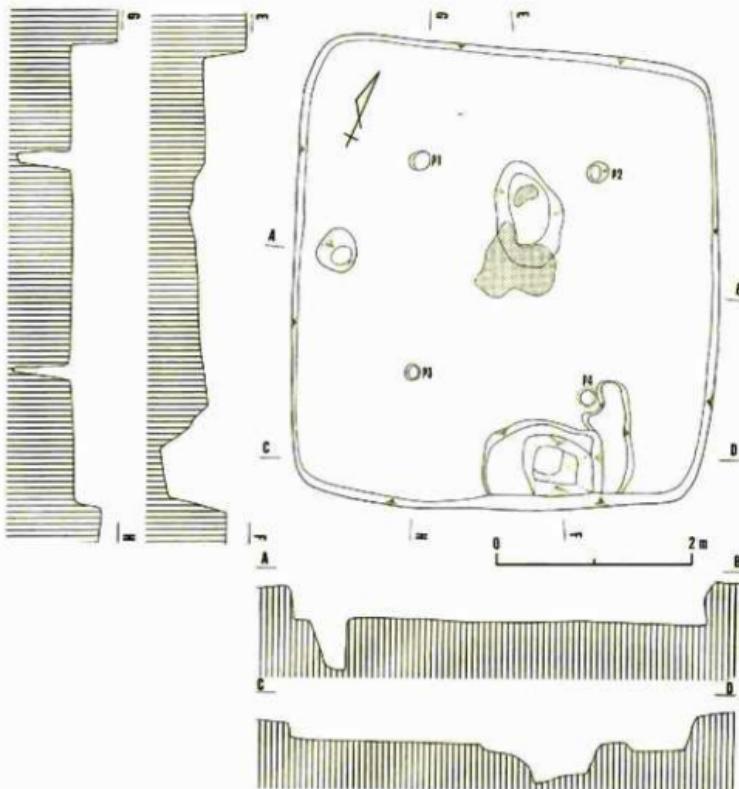
第3章 遺構（第2図）

第1節 住居址

久保屋敷遺跡の調査では、4軒の住居址が検出されており、すべて古墳時代前期に属する住居址である。

1号住居址（第3・4図、図版3・4）

形状 南北4.5m、東西4mの隅丸方形を呈する。壁は最高い所で50cm、最も低い所でも20cmある。床面はほぼ平坦で、周溝はない。西壁のはば中央部分、壁より15cmほどはなれ



第3図 1号住居址 (1/60)

て、直径40cm、深さ50cmほどの竪穴がある。また南壁に接して東西120cm×南北60cm、深さ40cmの不整方形の竪穴があり、この竪穴の東側に長さ110cm、幅30cm、高さ8cmほどの土堤状造構が作られている。

炉 住居址中央よりやや北側に110cm×70cmの不整楕円形の浅い凹みがあり、炭が広がっていた。その凹みの中心よりやや北側と凹みの南側が床が焼けて地床炉となっている。

柱穴 4本の柱穴がある。それぞれの床面からの深さは、P 1:50cm、P 2:42cm、P 3:50cm、P 4:50cmである。前述した西壁際の竪穴は、柱穴というよりも住居址に付随した何らかの施設と考えたほうがよいと思う。

遺物出土状態 1号住居址の出土遺物は土器以外めほしいものはない。その土器も床面直上で出土しているもの、床面より浮上して出土しているものなど、いろいろな出土状態を示す。しかし大まかな傾向として、南壁より住居址中心に向かって多量の土器が落ち込んでいるようである。その点から見て住居址自体に伴う土器と、住居廃絶後に廃棄された土器とが混在し、それぞれを正確に分離することは困難だろう。しかしいずれにしても本住居址出土土器は、床上20cmも浮上している土器も、床面直上の土器も、ほぼ同一時期のものであり極めて短時間の中で製作された編年的には良好な一括セットであろう。

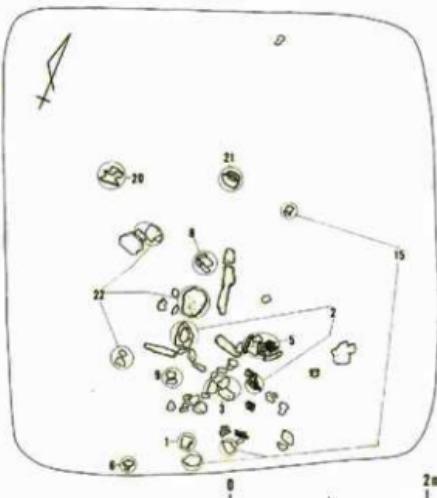
時期 五領式期

2号住居址（第5図、図版5）

2号住居址は耕作によって、ことごとく破壊されてしまっている。住居構築時の荒掘りのプランしか確認できなかった。壁、床、柱穴、火などは、すべてが既に存在していない。荒掘りのプランは、一辺約3.5mの隅丸方形を呈する。遺物は荒掘りプラン内の覆土中より土器片が数片出土するのみである。住居址の時期は、おそらく五領式期のものであろう。

3号住居址（第6図、図版5）

3号住居址も2号住居址と同様に耕作による破壊が著しい。当初プランを確認した段階ではその形状から方形周溝墓ではないかと思われたが、その規模の小さいことと焼土の発見に

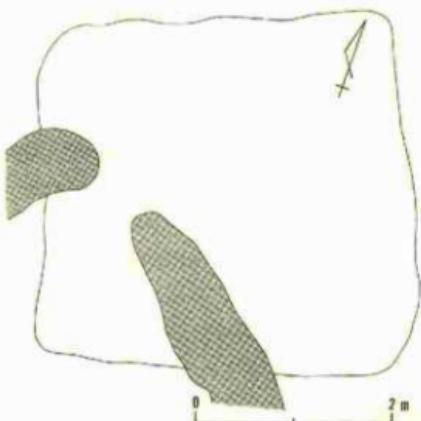


第4図 1号住居址出土遺物出土状態 (1/60)

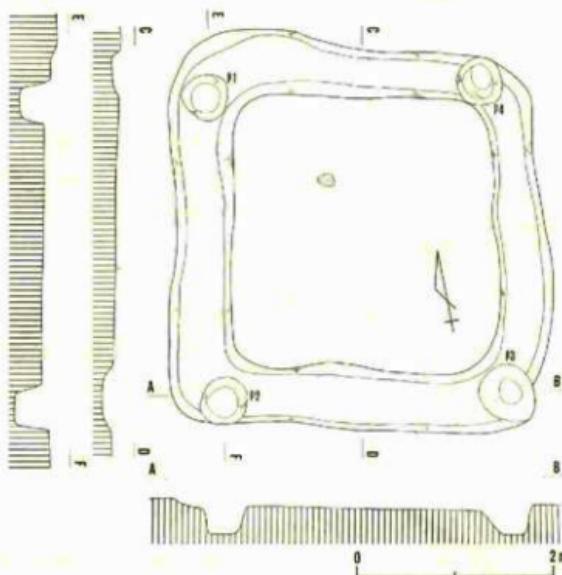
よって、やはり住居址の荒掘りであると判断した。荒掘りのプランは、一辺約3.5m、幅50cm前後の方形周構状のものであり、溝の深さは10~15cmほどである。溝の四隅には性格不明の直径50cm前後のピットが掘り込まれている。深さはP 1: 25cm、P 2: 26cm、P 3: 25cm、P 4: 34cm。焼土はプランの中心よりやや北西寄りにわずかに遺存している。床面はない。プラン内よりわずかに出土している土器片から考えて、五領式期の住居の荒掘りと考えられる。ちなみにP 1~P 4を柱穴の荒掘りと把えると、五領式期の一般的な住居址の構造から見て、一辺7mほどの巨大な住居址を想定せざるを得なくなる。これは県内の類例から考えると到底納得できない。それ故ここでは、P 1~P 4は一応性格不明としておくこととした。

4号住居址（第7・8図、図版6）

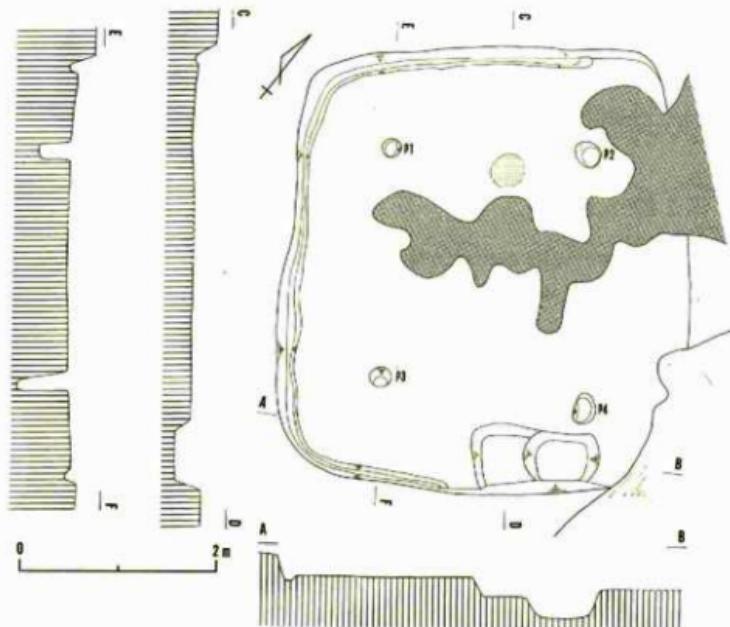
形状 東壁と南東隅が搅乱を受けて破壊されているものの、一辺約4mほどの隅丸方形を呈すると思われる。壁は最も高い所で27cmほどある。周溝も北壁、西壁、南壁の途中までめぐっているが、もともと全周していったかどうかは、東側の床面がやや軟弱なため不明



第5図 2号住居址 (1/60)



第6図 3号住居址 (1/60)



第7図 4号住居址(1/60)

である。床面はほぼ平坦であるが住居址東側より不整形な擾乱があり、住居址中央部分の床は、かなり破壊されている。1号住居址と同様に、南壁の中央よりやや東寄りに、東西120cm×南北60cm深さ30cmほどの長方形の竪穴が設けられている。しかし土堤状の遺構は存在しない。

炉 住居址中央よりやや北寄りに直径35cmほどの焼土が見られる。地床炉である。

柱穴 4本の柱穴がある。それぞれの床面からの深さは、P 1 : 30cm, P 2 : 27cm, P 3 : 50cm, P 4 : 20cmである。

遺物出土状態 本住居址出土の遺物は土器がすべてであり、多く



第8図 4号住居址遺物出土状態(1/60)

は床面直上から出土している。北壁の中央付近では床面直上で蓋と高杯の脚部が重なるように出土している(図版6)。多くの土器は、本住居址に伴う資料であろう。

(米田)

第2節 土塙

久保屋敷遺跡からは6基の土塙が検出された。弥生時代の1号土塙、縄文時代の2~5号土塙、時代不明の6号土塙がある。

1号土塙(第9図、図版7)

形状 平面は不整円形を呈する。底部は丸底である。動物生痕によって北部を切られている。最大長60cm、最大幅55cm、深さ28cmを有する。

遺物出土状態と所属時期 弥生時代中期の条痕文土器片が底面から10~20cmほど浮いた状態でまとまって出土した。おそらく同時期に形成された土塙と思われる。

2号土塙(第10図、図版7)

形状 一部発掘区外にかかるため未掘部分があるが、南東部と北東部にやや張り出しており、やや隅丸ぎみの円形を呈するものと思われる。底面は平坦。壁面はほぼ垂直である。最大長180cm、深さ30cmを有する。

土層 覆土は五層に区分できる。褐色から暗褐色の土層でローム層の色調に近い。最下層は、焼土粒や木炭片をかなり含む。

遺物出土状態と所属時期 覆土の中位ほどでチャート剥片が出土。土器片は最下層中に含まれていた。床面直上より5個の礫が出土した。何時期かの土器片が出土しているか時期不明。

3号土塙(第11図、図版8)

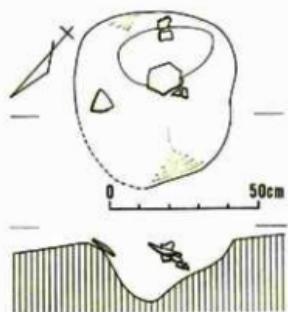
形状 平面形は不整梢円形である。底面は北部が10cmほど高く平坦であるのに対し、南部は中央部にむかってゆるやかにくぼむ。壁面はほとんど残存しない。最大長180cm、最大幅140cm、最深部20cm。

遺物出土状態と所属時期 擦痕を有する礫が北部底面直上より出土。土器は底面から15cmほど浮いた状態で出土した。出土土器から判断して曾利III式期のものと思われる。

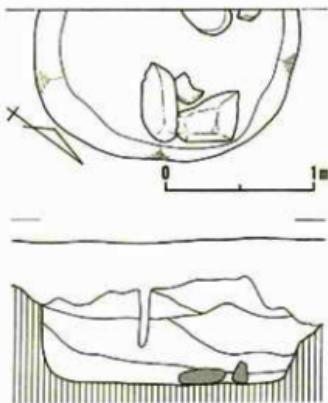
4号土塙(第12図、図版9)

形状 平面形は梢円を呈する。底面は平坦。壁面は外傾する。最大長230cm、最大幅200cm、最深部25cm。

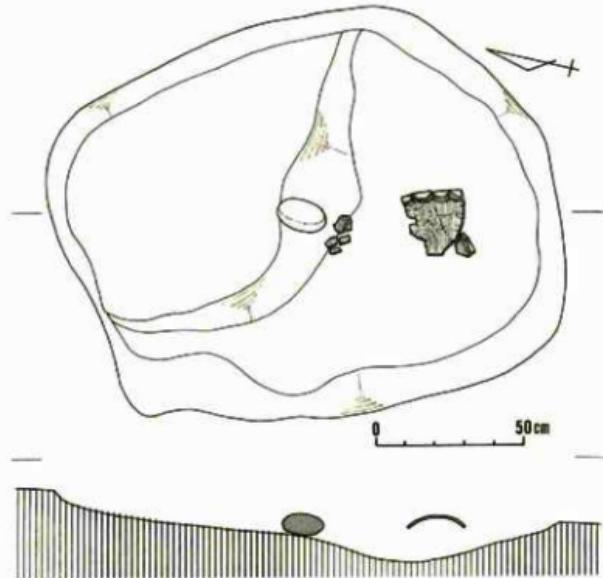
遺物出土状態と所属時期 土器は底面より20cmほど浮いた状態では同一面上で出土。北



第9図 1号土塙 (1/20)

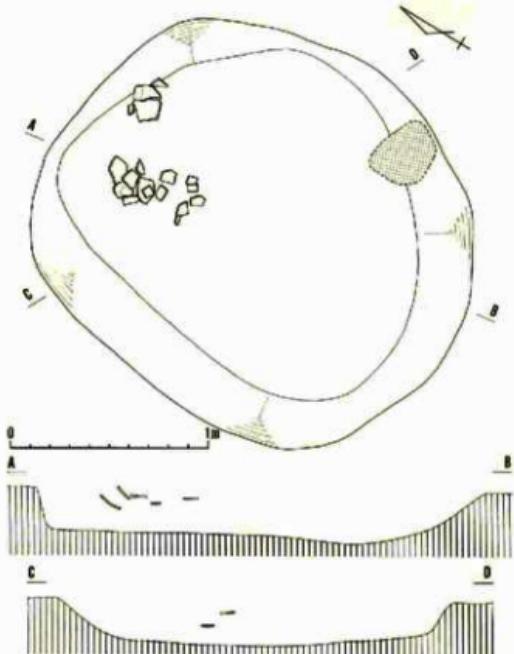


第10図 2号土塙 (1/40)



第11図 3号土塙 (1/20)

部に集中する。東部壁ぎわでは焼土がやはり底面より浮いた状態で出土した。出土土器より、曾利Ⅱ式期のものと思われる。



第12図 4号土塙 (1/30)

浮いた状態で出土した。大型破片は南部に多い。南部の落ち込みの北部には底面よりやや浮いて多くの礫が出土した。また、南部の落ち込みのはば中央の底面直上に焼土がみられた。出土土器より、曾利III式期のものと思われる。

6号土塙 (第14図、図版10)

形状 平面形は円形。底面は非常に平坦である。壁面はやや内湾し、若干外傾する。底部がやや張り出す。直径210cm、深さ130cm。

土層 底面直上に堆積した暗褐色粘質土の上面を幅5cmほどの黒色土が覆う。粘土ほどの粒度の上である。壁面ぎわには、軟質ながらローム層に近似する土層がみられる。壁面がかなり崩壊しているのだろう。壁面の内湾がかなり強かった可能性もある。中央部には、ロームブロックやそれぞれ若干明るさの違う黒褐色土がみられる。

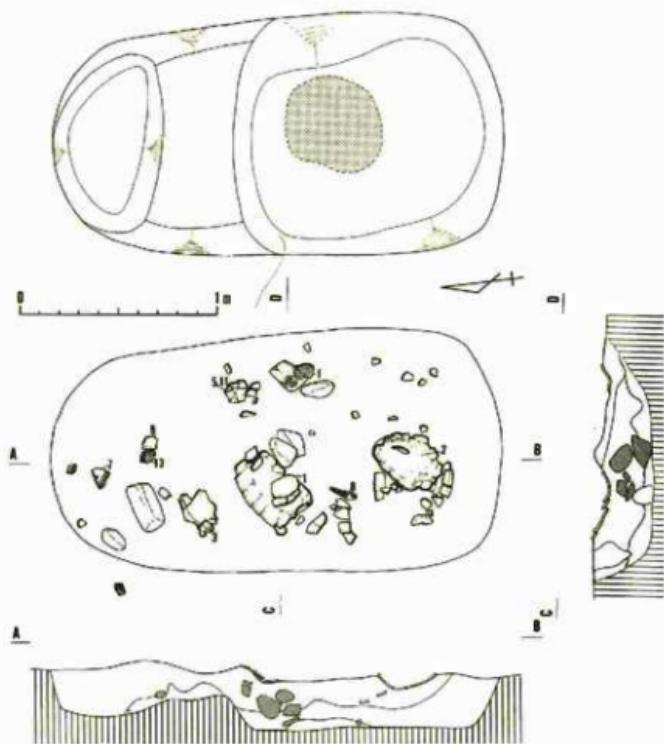
遺物出土状態と所属時期 底面直上で出土した礫2個以外は遺物がなく、時期不明である。

5号土塙 (第13図、 図版9・10)

形状 平面形が長楕円を呈す。北部と南部とに落ち込みをもつ。南部の落ち込みは隅丸方形状を呈し、底面は平坦で壁面は外傾する。中央やや北側に中段がある。北部の落ち込みは隅丸の三角形状で、底面はやや丸みをもつ。壁面は南側が非常にゆるやかであるのに対し、北側は急でやや外傾する。最大長230cm、最大幅120cm、南部最深部30cm、中段最深部15cm、北部最深部25cm。

遺物出土状態と所属時期

土器の大半は土塙確認面付近ではほぼ同一面上に底面より



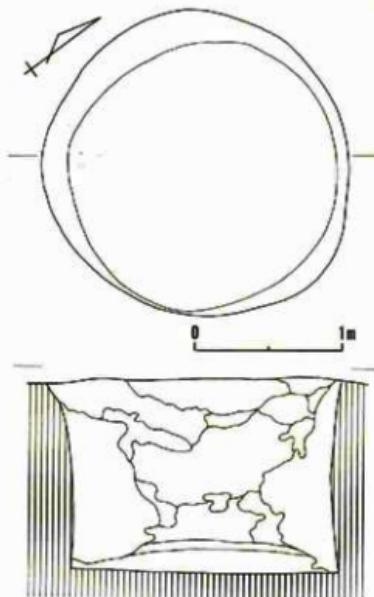
第13図 5号土塚と同遺物出土状態 (1/30)

第3節 溝

久保屋敷遺跡からは6本の溝が検出された。古墳時代の1号溝の他は時期不明である。

1号溝（第15図、図版11）

遺跡北部の小丘頂部東側を北西—南東方向に横切る長い溝である。中央やや南側でゆるやかに屈曲する。屈曲部より南側と北部10mほど底面が平坦である。溝中央部に行くにつながって底部の幅を減じ、底部がやや丸みをもつV字形となる。北端、南端は徐々に深さを減じる状況である。おそらく両端では特に多くの土壤流出があり、ある程度溝が失われているようである。また、全体的に深さを減じている可能性が強い。一部、動物生痕によって擾乱されている部分もある。長さ49m、幅60~90cm、深さは最も深い中央部で40cmである。覆土中より少量の土器片と大型の打製石斧が出土した。出土した土器から古墳時代前期のものと思われる。



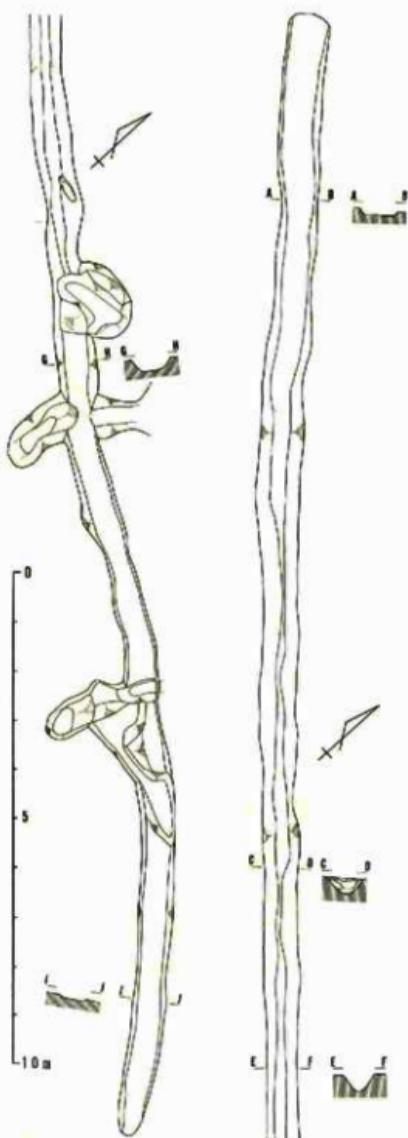
第14図 6号土塙 (1/40)

2号溝 (第16図)

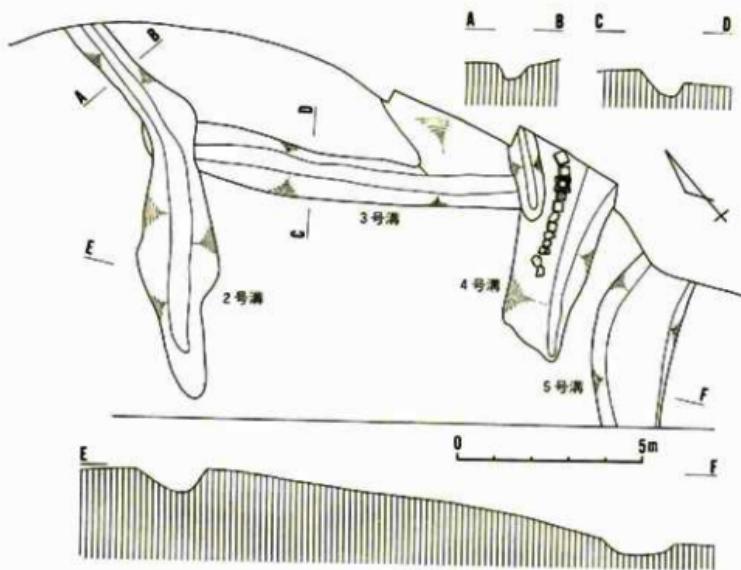
北一南方向の部分と北東一南西方向の部分がある。くの字形に屈曲する溝である。底部は丸く、壁面は外傾する。3号溝より古く、覆土も3、4、5号溝と違い黒色である。長さ10m、幅80~230cm。最深部が30cmである。出土遺物がなく時期不明。

3号溝 (第16図)

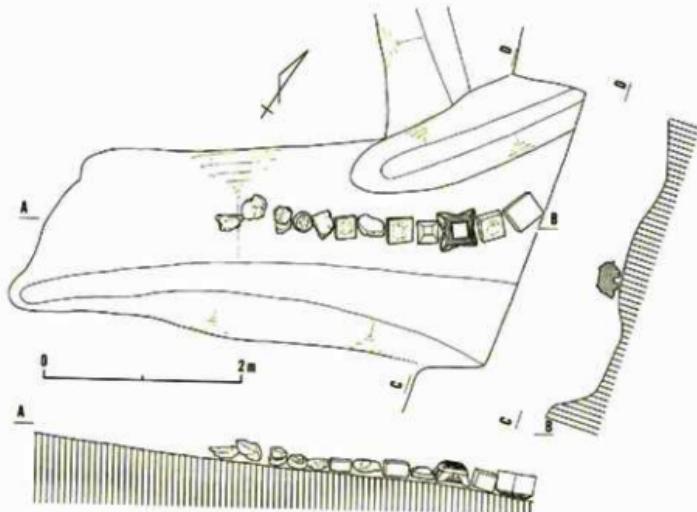
北西一南東方向の直線的な溝である。底部はやや丸みをもち、堅く踏みしめられたようになっている。壁面は外傾する。南東部の壁面は土壤流出で失われたらしい。2号溝を切っている。4号溝と覆土が同じであり連続するものと思われる。長さ10m、幅120~140cm。最深部が25cmである。出土遺物がなく時期不明である。道として用いられたのであろう。



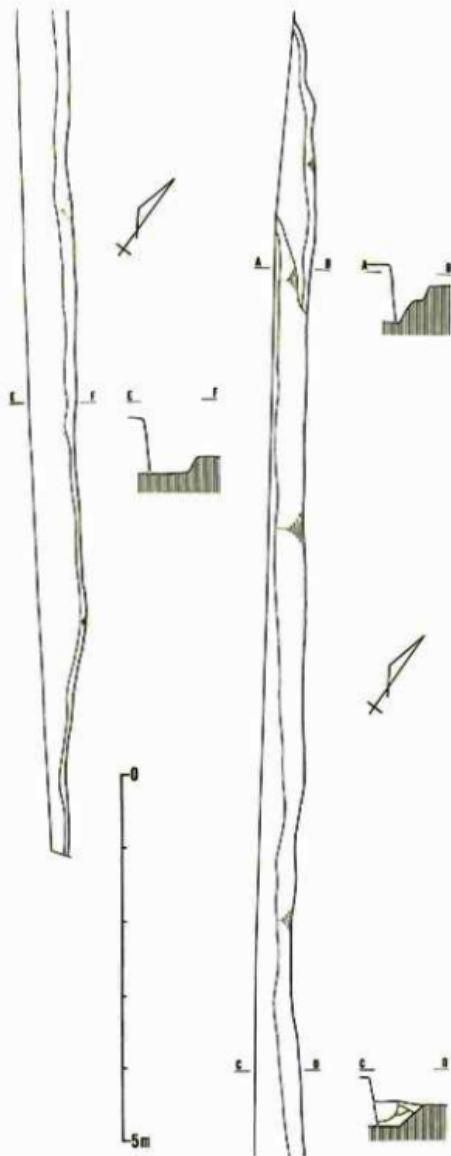
第15図 1号溝 (1/120)



第16図 2号・3号・4号・5号溝 (1/60)



第17図 4号溝と石列 (1/60)



第18図 6号溝 (1/80)

4号溝と石列 (第16・17図、図版12)

西一東方向の直線的な溝で、同方向の石列を伴う。北東部に、北東一南西方向の溝を伴う。いずれの溝も底面が踏みしめられたように堅い。底面は平坦で西に行くにしたがい狭くなる。南壁は強く外傾し、北壁は幅広く非常にゆるやかである。北東部の溝は非常に広く開口するU字形である。いずれも東側が深く、西にゆくにしたがって深さを減じて立ち消える。東部は、石垣によって切られている。長さ5m、幅170~210cm、最深部45cmである。北東部の溝は長さ260cm、幅60~80cm、最深部20cmである。石列は北東部の溝の南側、北壁斜面上にある。人頭大の自然礫6個、五輪塔地輪3個、同風輪、火輪および法隆印塔笠部、基礎各1個を用いている。これらは、長さ340cmに1列に配置されている。石列以外に出土遺物はないので江戸時代初期以後のものであろう。道として用いられたのだろう。

5号溝 (第16図)

4号溝と平行に並ぶ。北壁が北側に張り出している。底部は平坦で幅広い。壁面は外傾する。東端は石垣によって切られ、西端は発掘区外へ続く。長さ210cm、幅80~110cm、最深部20cmである。底部はやはり堅く踏みかためられたようになっており、道として用いられていたのだろう。出土遺物はなく時期不明。

6号溝（第18図、図版13）

北西—南東方向の溝で、発掘区の西限と平行する。溝西半は発掘区外であり、全体像は不明である。北部では上下二段となっている。底部は非常に平坦。壁面はやや内湾する部分もあるがおむね直線的で外傾する。底面と壁面の境界部は、非常に明瞭に作られている。南部にいくにしたがい深さを減じている。長さ27m、最深部40cm。覆土中より縄文時代の土器が出土しているが、覆土は非常に軟質の黒色土であり、縄文時代よりも時期的に新しいものであろう。

（保坂）

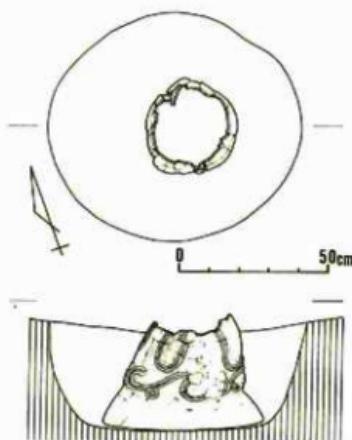
第4節 埋設土器

1号埋設土器（第19図、図版14）

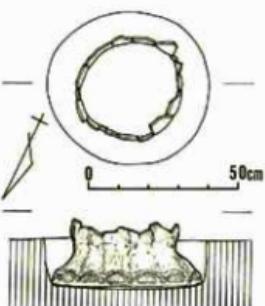
1号埋設土器は、3号住居址の東側の遺構確認面を精査中に発見された。曾利田式でも新しい様相を示す逆位の埋設土器である。底部付近は耕作によって既に破壊されているが、残存している部分の土器全体からの比率で見ると、もともとは、ほぼ完全な形の埋設土器であったと思われる。おそらく底部穿孔か、底部の一部を打ち欠いた状態で埋設されていたものであろう。確認された掘り込みは、直径80cm、深さ40cmほどの竪穴であり、口径55cmほどの土器を入れるには充分な大きさである。土器の周囲は、ロームを多く含む黄褐色土で埋められていた。土器内部からの出土遺物は、同一個体の土器片が数片と石器が1点のみであった。土器の時期から考えると、単独の埋設土器というよりも、住居址内埋設土器であったろう。周辺を精査したが、桑の根の搅乱が著しく、柱穴、火址などの住居址に付随する施設は確認できなかった。

2号埋設土器（第20図、図版14）

2号埋設土器は、1号埋設土器の北約10mのところで、やはり遺構確認面を精査中に発見した。曾利田式でも比較的古い様相を示す逆位の埋設土器である。胴部下半は耕作によって破壊されているが、もともとの埋設時の土器の状態は不明である。



第19図 1号埋設土器 (1/20)



第20図 2号埋設土器 (1/20)

る。確認された掘り込みは、直径55cm、深さ20cmほどの豊穴であり、土器の口径50cmと比べると、ほぼピッタリと土器が納まる大きさである。土器の周囲は、1号と同様に、ロームを多く含む黄褐色土で埋められている。土器内部からの出土遺物は全くない。上器の時期から考えると、やはり1号埋設土器と同様に、住居址内の埋設土器であったと思われる。周辺を精査したが、柱穴や炉址は確認できなかった。

(米田)

第4章 遺物

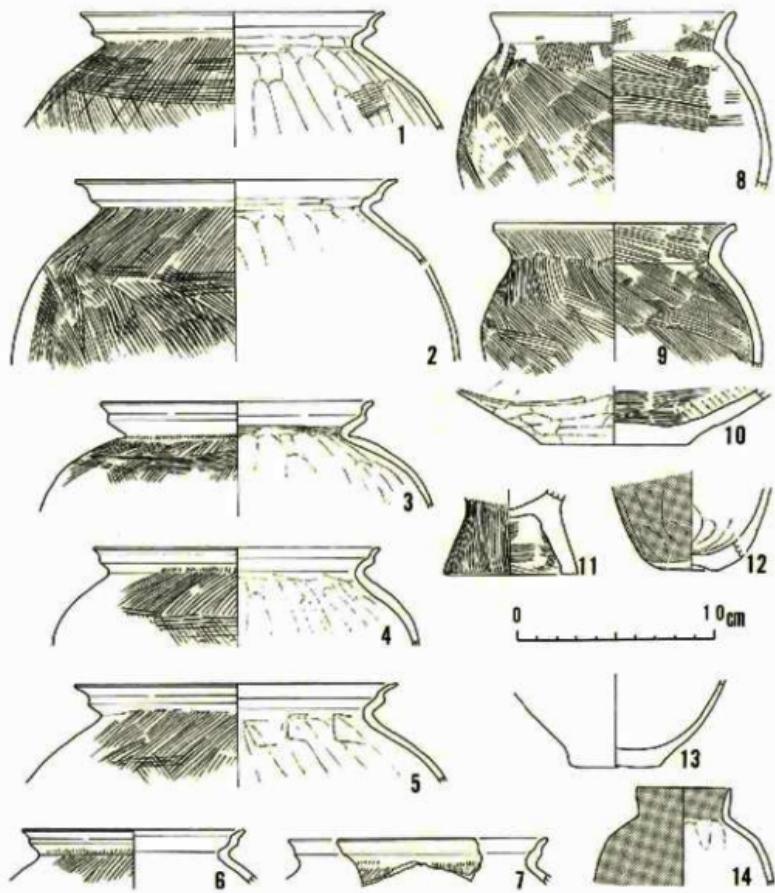
第1節 土器

久保屋敷遺跡からは、縄文時代早期・前期・中期、弥生時代中期、古墳時代前期の土器が出土した。特に1号住居址から古墳時代前期初頭の良好な一括資料を得ている。以下各造構ごとに出土土器について記述する。

1号住居址出土土器（第21・22図、図版15・16・17）

古墳時代前期初頭の一括資料である。夔形土器、壺形土器、高杯形土器がある。

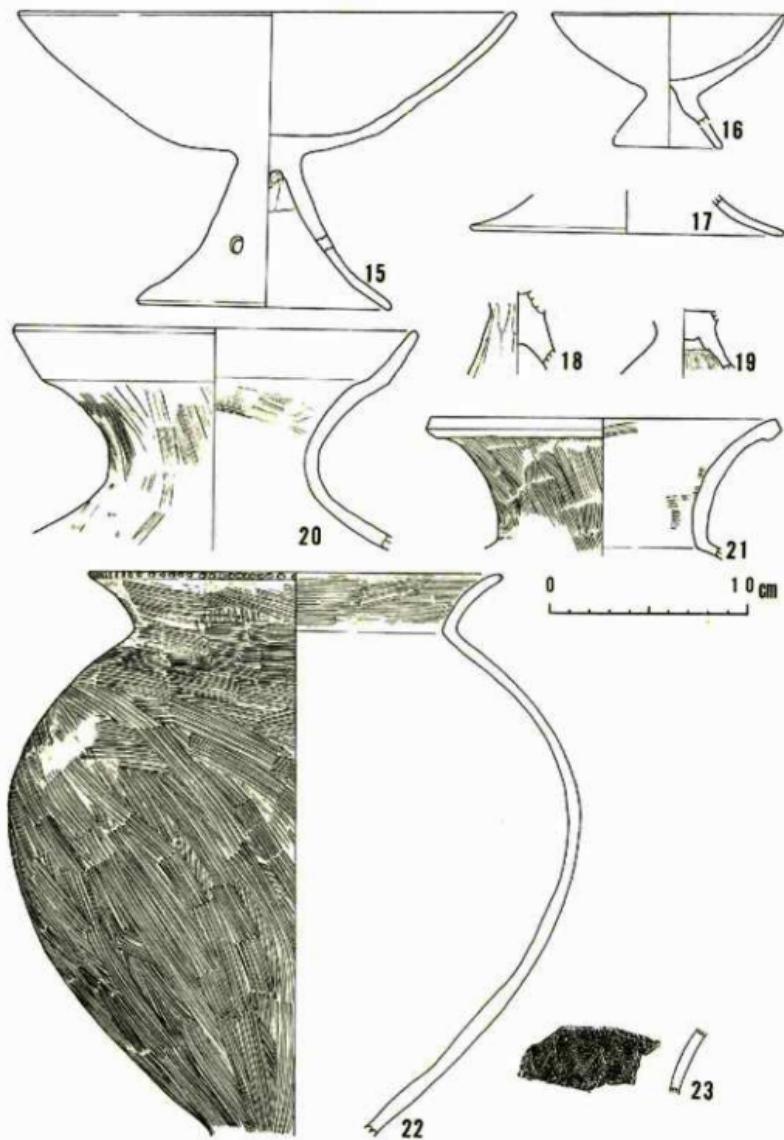
1. 壺形土器 1はS字状口縁台付甕である。口縁部は内外面とも横ナデ。口唇内側に一条の浅い沈線があり、断面がかなりとがる。外面肩部以下は縱方向刷毛目整形で、肩部ではその後に帯状に刷毛目が横走する。内面胴部は横方向の刷毛目が一部残存。その後の指頭による押圧痕が縱方向の浅い溝状となって全面にみられる。内側頭部には、指頭圧痕以後、口縁部横ナデ以前にヘラによる横方向調整がみられる。2はS字状口縁台付甕である。口唇断面が丸みをもつ点、胴部内面に刷毛目を残さない点以外は、整形・調整とも1と同様である。3はS字状口縁台付甕である。肩部がかなり張る。口縁部内外面は横ナデ。口唇の沈線は見られない。肩部に横走する刷毛目を有する。胴部内面に指頭圧痕を有し、頸部内面には横方向ヘラ調整がなされている。4はS字状口縁台付甕である。口縁部内外面は横ナデ。口唇の沈線はみられないが平坦である。肩部外面に横走する刷毛目を有す。胴部内面に指頭圧痕がみられ、頸部内面に横方向ヘラ調整がなされている。5はS字状口縁台付甕である。口唇内面は平坦。口縁内外面は横ナデ。肩部外面に横走する刷毛目を有す。肩部内面では指頭圧痕上をヘラによる調整がなされている。6はS字状口縁台付甕である。口縁部内外面は横ナデ。肩部外面縦方向刷毛目。同内面には指頭圧痕がみられる。7はS字状口縁台付甕である。特徴は6と同様。口縁部の外傾が他にくらべ弱い。8の頸部はくの字形に屈曲する。やや内湾する口縁部は外傾する。口縁部外面は横ナデ。頸部外面は縦方向刷毛目。胴部には右下りの刷毛目がみられる。内面は口縁部から胴部上半に刷毛目がみられる。内面胴部下半は横ナデ。部分的に棒状工具による横方向磨きがみられる。9の頸部はくの字形に屈曲し、内面に棱がつく。口縁部は内湾し外傾する。口唇外面が縦に平坦である。内外面とも全面に右下りの刷毛目がみられる。肩部内面の刷毛目は非常に細く、別の工具を用いている。口縁部外面は刷毛目の上に横ナデがみられる。10は台付甕の台部である。内外面とも刷毛目整形。11は台付甕である。台部を欠損する。胴部上半に最大径を有す。頸部はくの字形に屈曲。口縁部は内湾して外傾する。外面は全面が刷毛目整形がなされ、口縁部ではその上を横ナデされている。



第21図 1号住居址出土土器 (1) (1/3)

口唇に棒状工具によるきざみ目がある。口縁部内面は刷毛目整形。胴部内面は全面に横ナデがみられる。23は弥生時代後期の土器である。櫛歯状施文具により波状文がほどこされている。内外面とも横ナデ。

2. 壺形土器 10は底部破片である。外面は全面ヘラ削りされている。内面は刷毛目整形。底部のみ未調整である。12は小型壺形土器である。底部は明瞭にくぼむ。底部、胴部全面にわたり外面はヘラ磨き、内面はナデ調整されている。胴部外面に赤色塗料がみられる。13は小型壺形土器である。底部がやや突出し平坦。中央がやくぼむ。内外面ともナデ調整。14は小型壺形土器である。頸部はくの字形に屈曲。口縁部はやや外傾する。外面全面ヘラ磨き。



第22図 1号住居址出土土器 (2) (1/3)

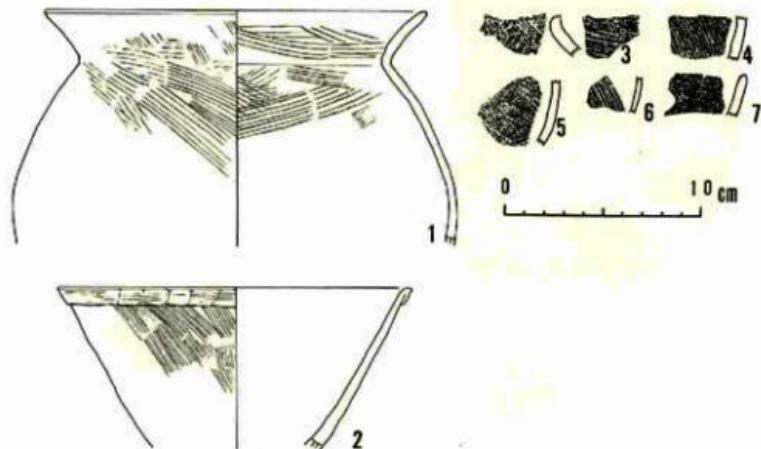
内面口縁部はヘラ磨き。胴部には指頭圧痕がみられる。外面全面および口縁部内面に赤色塗料がみられる。20は複合口縁の壺形土器である。外面口縁部の稜より上方は横ナデ。稜より頸部にかけて、刷毛目整形の後に横方向のヘラにより調整がみられ、さらにヘラ磨きされている。胴部は刷毛目の後ヘラ磨き。内面は、口縁屈曲部より上方で横ナデ、頸部で刷毛目整形がみられ、さらに全面をヘラ磨きしている。21は折り返し口縁の壺形土器である。口唇部は断面コの字形。口唇部と折り返し部外側は横ナデ。外面全面に刷毛目整形がなされ、肩部はヘラ磨きされている。内面は全面に刷毛目がみられ、口縁部・頸部はヘラ磨きされている。

3. 高杯形土器 15は底部がやや屈曲する大型の高杯形土器である。身部は内外面ともヘラ磨き。脚部には円孔が3孔みられる。外面ヘラ磨き。内面は、縁部が横ナデ、それ以外はヘラ削りされている。16は身部が浅い椀状を呈する小型品である。身部内外面および脚部外側はヘラ磨きされている。脚部内面は一部に刷毛目が残存。その上を横ナデされている。17は脚部破片である。外面に刷毛目が残存、その上をヘラ磨きされている。内面は横ナデ。18の外面はヘラ削りの後ヘラ磨き。内面はナデ調整がみられる。19の外面は横ナデ。内面は刷毛目整形されている。

2号住居址（第23図）

古墳時代前期の土器片が若干出土した。壺形土器、壺形土器、甑形土器がある。

1. 壺形土器 1は台付甕である。頸部がくの字形に屈曲。口縁部はやや内湾して外傾する。内外面とも全面に刷毛目整形が施されている。3は肩部の破片である。内外面とも刷毛目がみられる。内面はその上にヘラ調整がされている。4は胴部破片である。外面は刷毛目



第23図 2号住居址出土土器 (1/3)

整形。内外面は刷毛目整形の後ヘラ調整されている。5は胴部破片である。内外面とも刷毛目整形。6はS字状口縁台付甕の胴部破片である。刷毛目は外面のみみられる。

2. 壺形土器 7は口縁部破片である。口唇部が平坦。内外面ともヘラ磨きの後、赤彩されている。

3. 甑形土器 2は折り返し口縁である。口唇部は平坦かややくぼむ。外面は刷毛目整形。内面および折り返し部外面は横ナデされている。



3号住居址（第24図）

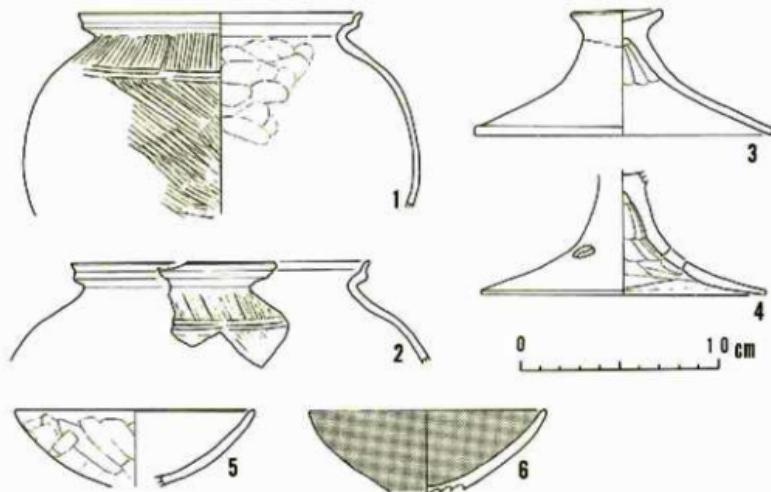
古墳時代前期の甕形土器の破片が出土している。 第24図 3号住居址出土土器（1/3）
1は胴部破片である。外面刷毛目整形。内面はヘラ調整されている。2は肩部破片である。
外面刷毛目整形。内面ヘラ調整。3は肩部破片である。外面刷毛目整形。内面ヘラ調整。

4号住居址（第25図、図版17・18）

古墳時代前期の甕形土器、高杯形土器、蓋形土器が出土している。

1. 甕形土器 1はS字状口縁台付甕である。外面頸部以下は刷毛目整形。肩部に横走する刷毛目を有す。口縁部内外面および肩部内面は横ナデ。肩部内面には指頭圧痕がみられる。2はS字状口縁台付甕である。肩部外面に刷毛目が横走する。整形、調整は1と同様。

2. 高杯形土器 4は円孔を3孔有する脚部である。外面はヘラ磨き。内面は接合部付近がヘラ削り。強く外反する部分はヘラ調整されている。5は楕形の身部である。外面はヘラ



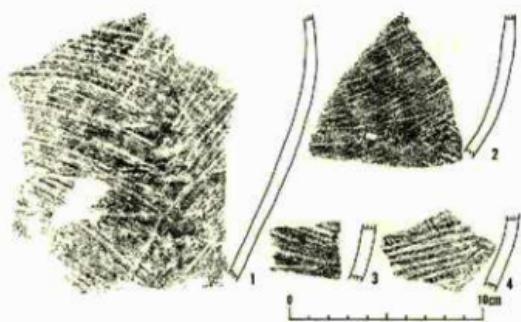
第25図 4号住居址出土土器（1/3）

削りの後ヘラ磨き。内面は全面ヘラ磨きされている。6は楕形の身部である。内外面ともヘラ磨き。

3. 蓋形土器 3は完成品である。内外面とも横ナテ。内面つまみ部側はヘラ削り。つまみ部は粘土の接合部が残存し、成形の様子がわかる。突出部周辺に粘土紐を巻き、外傾させる。その上に蓋をするように円形粘土板をかぶせ、中央をくぼませる。なお、身端部は平坦あるいは部分的に沈線状にくぼむ。

1号土塙出土土器 (第26図、図版19)

弥生時代中期の蓋形土器、壺形土器の破片が出土している。いずれも条痕文状の文様を有



第26図 1号土塙出土土器 (1/3)

する。1・2は綾杉状に交錯する条痕文状の文様を有する土器の破片である。1が蓋形土器、2が壺形土器と思われる。いずれも内面はナテ調整。3・4は横走する条痕文状の文様を有する。内面はナテ調整。
(保坂)

2号土塙出土土器 (第27図)

1は縄文時代早期の円印押

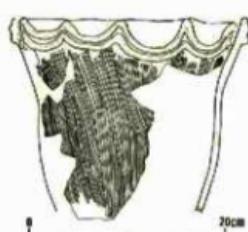


第27図 2号土塙出土土器 (1/3)

3号土塙出土土器 (第28図、図版19)

縄文時代中期後半の深鉢形土器片が出土している。

口縁部に2本の粘土紐を弧状に連続して貼付している。体部には櫛状施文具で条線文を施す。曾利田式土器である。



第28図 3号土塙出土土器 (1/6)

4号土塙出土土器 (第29図)

すべて縄文時代中期後半の土器である。1はかなり大型の土器の底部である。網代痕が見られる。2・3・5は同一個体かもしれないが、地文に縄文が施されている破片である。

3は結節縄文が横位に回転させられている非常に珍しい土器である。1～5まで全て曾利田式と思われる。

5号土塙出土土器（第30・31図、図版20）

出土している土器は、10を除き、他はすべて曾利田式土器である。

1は両耳把手付土器である。この種の土器は曾利田式土器の中に多く見ることができるが、本例は、口縁部の外反の度合いも弱くなつて立ち気味になり、頸部下の装飾帯も区画がかなり曖昧になつてきている。

2は口縁部に無文帶を有する深鉢形土器である。口縁部の全体的な形状は、ほとんどの部分が欠損しているため不明。口縁部には厚い帯状の粘土を貼付し、その中に楕円形のモチーフを掘り込んでいる。体部は幅広い隆帶で渦巻状の文様帯区画を行ない、その上から沈線で渦巻文を施している。地文は櫛状施文具による条線文であり、地文を施文後に隆帶の縁をヘラ状施文具でなぞって沈線文を施している。

3も口縁部に厚い帯状の粘土を貼付し、その中に円形などのモチーフを掘り込んでいる。口縁は波状を呈し、大きめの突起が4単位、それと交互に小さめの突起が4単位付けられていたと思われる。体部の地文は繩文であり、幅広い沈線文で文様帯を区画した後に施してある。

4は1と同様な両耳把手付土器の破片である。5・11・14は同一個体と思われる。

(米田)

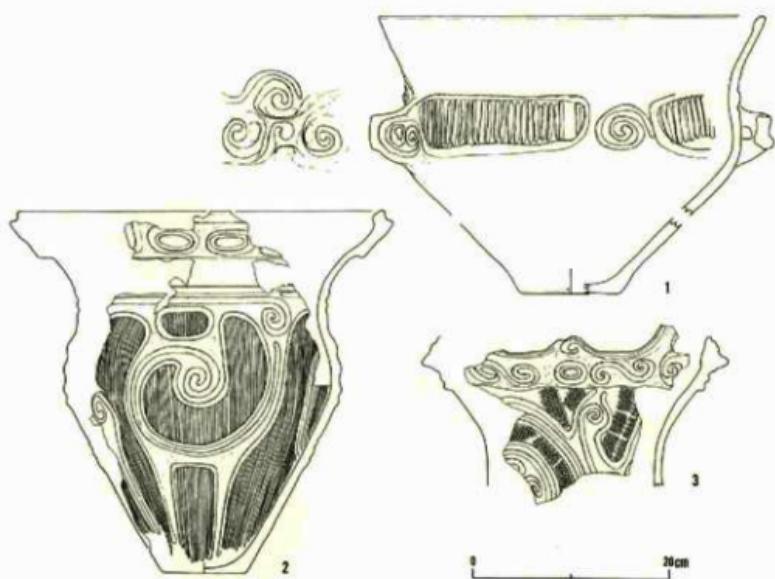
1号溝出土土器（第32図）

繩文時代早期末の繊維土器、弥生時代中期の条痕文状の文様を有する土器、古墳時代前期の土器が出土している。いずれも破片である。1～4は繊維土器である。内外面ともナテ調整。いずれも外面が黄褐色、内面が黒色を呈す。9～11は条痕文状の文様を有する土器である。内面はナテ調整。5は外面に非常に細かな刷毛目がみられる。内面はナテ調整。古墳時代前期のものと思われる。6は断面V字形の条線を有する。内外面ともナテ調整。時期不明。7は外面に刷毛目がみられる。内面ナテ調整。古墳時代前期のものと思われる。8は外面に細かな刷毛目を有する。内面ヘラ磨き。壺形土器の破片であろう。古墳時代前期のものと思われる。

(保坂)



第29図 4号土塙出土土器 (1/6, 1/3)



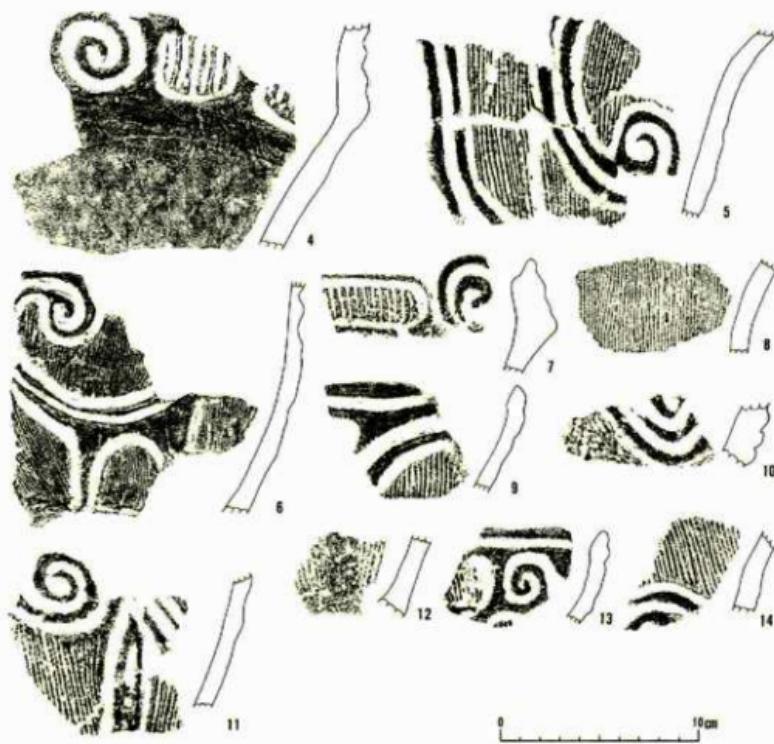
第30図 5号土塚出土土器 (1) (1/6)

1号埋設土器 (図版21)

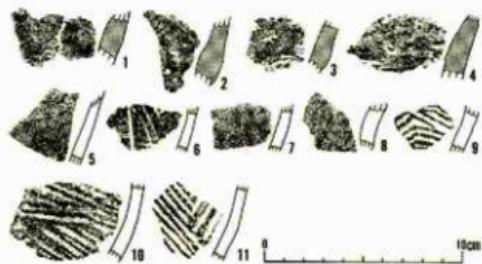
1号埋設土器は発掘調査の時点より、遺存状態が極端に悪く、遺物回収時にはボロボロと崩れてしまう有様であった。復原に努力したものの全体のモチーフは全く把握できない状態であり、写真を掲載するにとどめた。おおよそのモチーフは埋設状態の図面（第19図）を参考にしていただきたい。なお法量は、口径54cm、頸部径36.6cm、残存高36cm、残存底部径25cm、口頸部幅15cmである。X字状把手の数は4～5個あったと思われる。時期は曾利田式である。

2号埋設土器 (第33図、図版21)

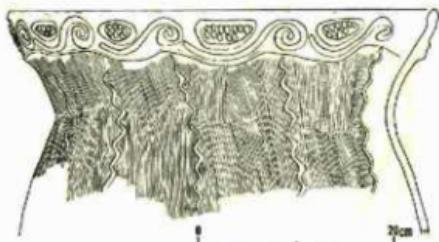
口径44cmをはかる大形の深鉢形土器である。頸部に稜が見られないものの、口頸部はかなり大きく外反している。口縁部には、薄い帯状の粘土をめぐらして貼付し、その上からヘラ状施文具で、渦巻文や半月形のモチーフを幅広い沈線文で施している。その半月形のモチーフの中へ、やはりヘラ状の施文具で刺突文をついている。体部には蛇行する沈線の懸垂文が丁度口縁部の渦巻文の直下から垂下させられている。渦巻文・半月文、蛇行懸垂文はすべて12単位ずつ施されている。地文には櫛状の施文具で条線文が施されるが、これは懸垂文をひく前に付けられたものである。曾利田式でも比較的古い段階の土器であろう。



第31図 5号土坑出土土器 (2) (1/3)



第32図 1号溝出土土器 (1/3)



第33図 2号埋設土器 (1/6)

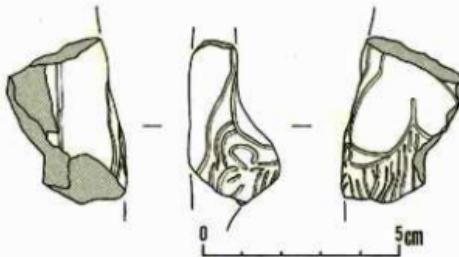


第34図 表面採集土器 (1/3)

第2節 土偶

5号土塙出土土偶 (第35図、図版22)

久保屋敷遺跡では5号土塙より1点の土偶が出土したのみである。腹と腰の部分であり、その他の部分は欠損している。腹部には妊娠線があり、臀部と思われる部分には腰翼を表現するような刻線が施されている。土偶の大きさ、形、文様表現などから見て、縄文時代中期後半（曾利式期）の土偶と考えられよう。



第35図 5号土塙出土土偶 (2/3)

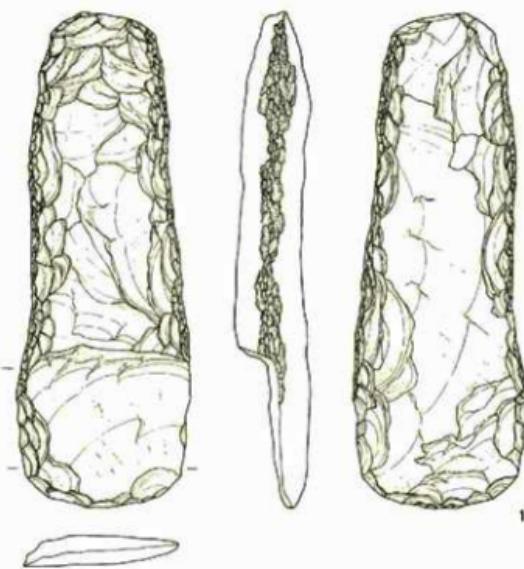
(米田)

第3節 石器

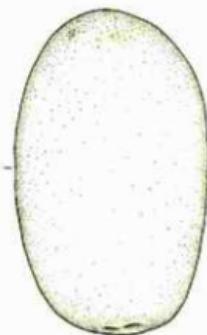
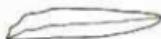
縄文時代の打製石斧、楔形石器、石核、剝片、擦痕を有する疊、弥生時代のものと思われる打製石斧が出土している。

打製石斧 (第36図1～3、第37図7、図版11)

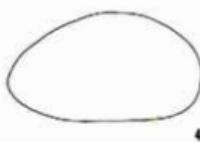
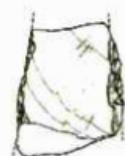
第36図1は長さ25cmにもおよぶ大型品である。楔形。刃部は円刃。側面がやや湾曲する。刃部周辺と頭端部以外の両縁部に敲打痕がみられる。刃部は大きな1枚の剥離によって薄くなっているが、周辺の剥離痕の状況から、使用中剥落した可能性もある。重量1003.7g。粘



1



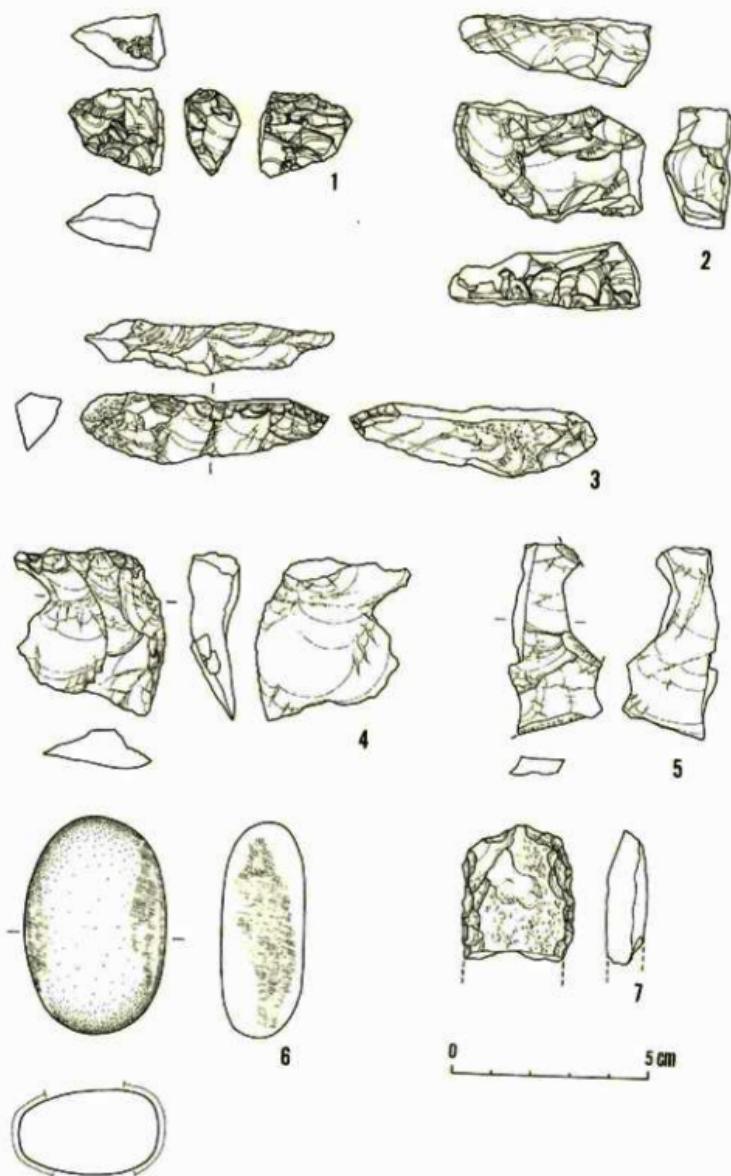
2



4



第36図 石器 (1) (1/3)



第37圖 石器 (2) (2/3)

板岩製。1号溝内出土。弥生時代の可能性がある。第36図2は左側縁部が強く抉り込む分銅形打製石斧と思われる。頭部欠損。刃部は円刃。粘板岩製。1号溝よりやや東側で出土。弥生時代の可能性もある。第36図3は楔形打製石斧である。刃部、頭部を欠損。粘板岩製。2号住居址内出土。繩文時代のものか。第37図7は短冊形打製石斧の頭部である。表面に自然面を有す。粘板岩製。6号溝内出土。繩文時代のものであろう。

楔形石器（第37図1、図版11）

5号土塙内より1点出土している。表裏両面に上下両縁部から細かな剥離がみられる。剥離は小規模で、反対側縁に至るようなものはない。中央部に素材の剥離痕を残す。上方の縁部には打撃の痕跡がある。

石核（第37図2、図版11）

5号土塙内より1点出土した。剥片剥離作業面は、上面、正面、右側面にみられる。いずれも寸ばかりの縦長剥片あるいは横長剥片を剥離したらしい。下面には、剥片剥離作業面とは思われない細かな剥離が連続する部分がある。左右両側で剥片剥離作業面に切られている。一時スクレイバーとしても利用されたのかもしれない。裏面は節理面。

剥片（第37図3～5、図版11）

3は石核の頭部が節理にそって剥離したものらしい。頭部調整風の細かな剥離がみられる。チャート製。4は寸ばかりの縦長剥片である。主剥離面のバルブが不明瞭である。チャート製。3と同一個体と思われる。5は打面部、左側縁部、右側縁の一部を欠損する。チャート製である。4とは別個体。3～4はいずれも2号土塙内出土。繩文時代のものであろう。

擦痕を有する礫（第36図4、第37図6、図版11）

第36図4は大型の円礫を利用したものである。表面側に長軸方向の若干の擦痕を有する。1483.2g。安山岩である。3号土塙内出土。第37図6は小型の円礫を利用したものである。両側面に短軸方向の擦痕が広範囲にみられる。74.4g。砂岩である。礫表面は非常に平滑で光沢があるほどである。1号埋設土器内出土。いずれも繩文時代のものであろう。

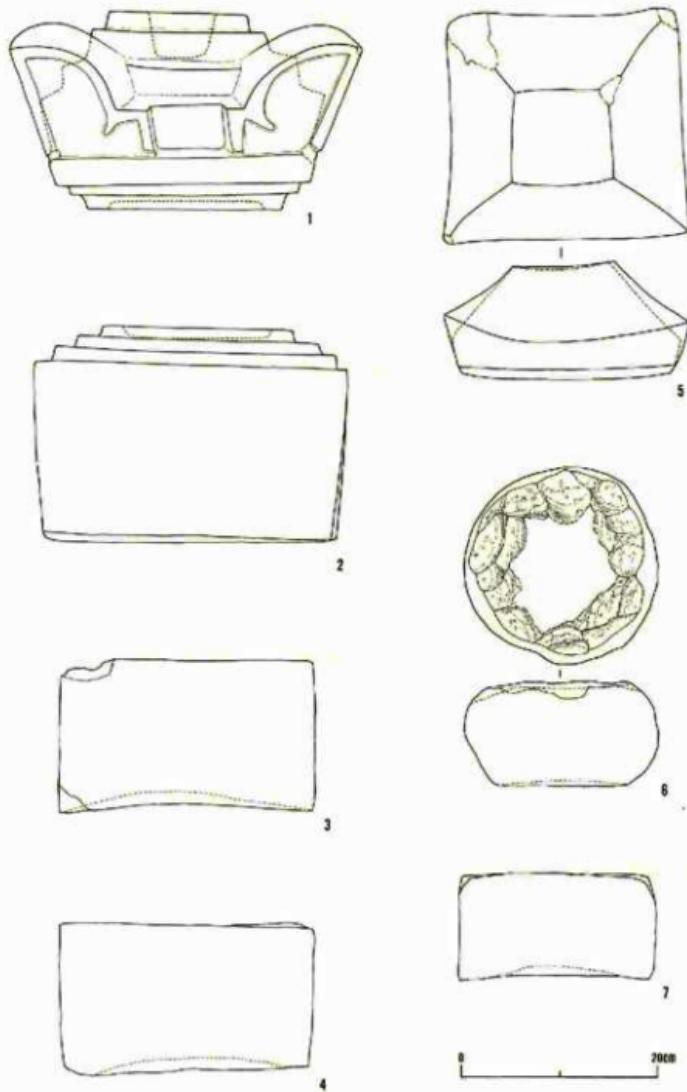
(保坂)

第4節 石塔

久保屋敷遺跡では4号溝の壁に沿って並べられた石塔類が発見されている。

宝鏡印塔（第38図1・2、図版23）

1は笠の部分であり、2は基礎の部分である。塔身の差し込み部分の大きさも、ほぼ同一



第38図 石塔 (1/6)

であり、もともと同一個体の一部である可能性が強い。ともあれ全体の姿が不明であり、時代も幅をもたせて、室町時代末～江戸時代初頭までの間のものと考えておきたい。

五輪塔（第38図3～7、図版23）

3、4、7は地輪の部分であり、5は火輪、6は風輪の部分である。地輪の数からみると最低でも3基の五輪塔が破壊されたことになる。地輪の相対的な厚みの加減や、火輪の形状から見て、宝篋印塔と同様に、室町時代末～江戸時代初頭の間のものであろう。（米山）

第5章 まとめ

第1節 繩文時代の遺構と遺物

久保屋敷遺跡では、確実な住居址は検出されなかつたが、繩文時代中期後半の土器を多量に出土している。もともと同時代の集落が存在していたのであろうが、耕作によってかなりの部分が破壊されてしまったのであろう。集落遺跡と密接な関連を有する土偶が一点出土していることからも、集落存在の一つの証拠となるであろう。

その他、早期、前期の土器もわずかに出土しているが、久保屋敷遺跡の南隣の台地には繩文時代早期の条痕文系土器が多量に散布している大石遺跡があり、この地域も古く繩文時代の初めより人々の生活は活発であったことがうかがえる。まだまだ未知の繩文遺跡が数多く存在することは間違いない。

第2節 古墳時代前期の遺構と遺物

遺構について

久保屋敷遺跡では古墳時代前期の住居址が4軒発見されているが、うち2軒は大部分が破壊されている。1号住居址は完全な形をとどめているが、4号住居址は壁の一部分と床の多くの部分に擾乱を受けている。1号住居址で特徴的なのは、南壁東側に存在する土堤状遺構とそれに隣接する方形竪穴であろう。同様の遺構は県内でも、境川村京原遺跡⁽¹⁾、塙山市西田遺跡⁽²⁾、葦崎市坂井南遺跡⁽³⁾などで発見されている。古墳時代前期の住居址では一般的なものであることが、本遺跡の調査で更に明白なものになった。なお4号住居址は、ちょうど床面のレベル程まで擾乱を受けているため、方形竪穴は検出されたものの、当初より土堤状遺構が存在していなかったかどうかは不明である。

遺物について

とくに注目に値するのは1号住居址出土の一括資料であろう。S字状口縁の台付甕で肩の部分に横位の刷毛目文が施される一群の土器は、同種の土器の中でも比較的古式なものと考えられており、1号住居址はそれらの土器をまとめて出土している。更に口唇に刻みを付けられた大形の台付甕も共伴していたり、混入の可能性は強いものの、弥生時代末の甕の破片も共伴している。全体として、五領式土器と呼ばれる一群の中でも、かなり古い時代のものである傾向を示しているわけである。同種の資料は塙山市西田遺跡でも検出されており、同遺跡では多くの住居址重複例から、それらの土器を出土する住居址が最下層の住居址であ

ることが確認されているという。山梨県内で発掘調査された古墳時代前期の遺跡は前述した3遺跡が主なものである。特に西田遺跡では、50数軒の当該期の住居址が検出されており、本報告書及びこれらの3遺跡の発掘の成果によって、本県における五領式土器の研究は飛躍的に前進するであろう。

なお久保屋敷遺跡1号住居址出土土器の概ねの実年代について触れると、県内でS字状口縁の台付甕が一般的になる時期は、4世紀後半から5世紀前半頃と考えられており、その点からすれば、4世紀中頃のものと見えることが可能であろう。また4号住居址出土土器も同時のものと考えられる。

(米田)

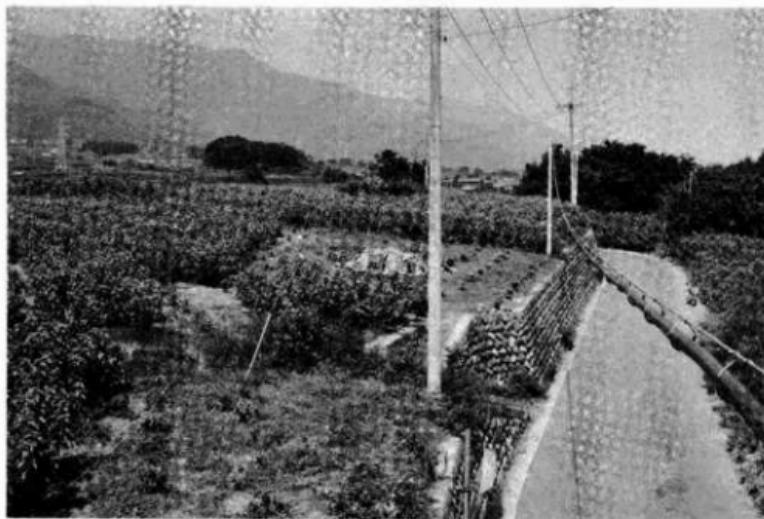
〈注〉

- (1) 萩原三雄他 1974「京原」山梨県教育委員会
- (2) 1978年山梨県教育委員会が調査。現在整理中。
- (3) 1983年韮崎市教育委員会が調査。現在整理中。

図 版



(1) 久保屋敷遺跡南側（北方より）



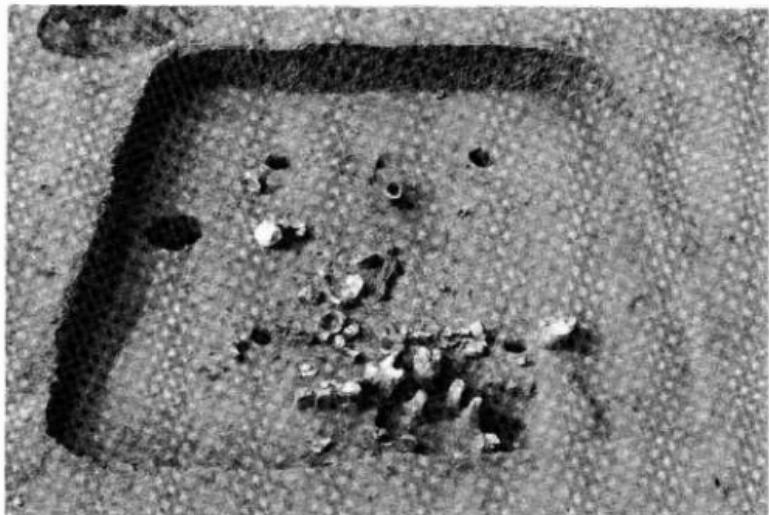
(2) 久保屋敷遺跡北側（南方より）



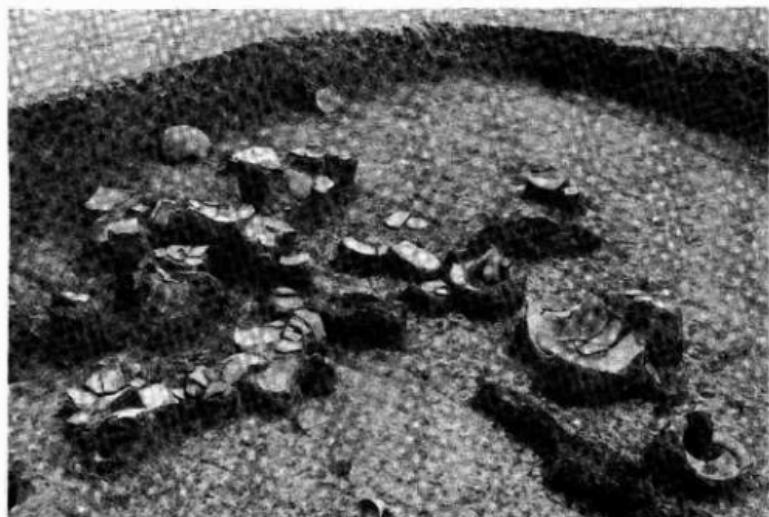
(1) 道路南側造構確認状態



(2) 1号住居址発掘風景



(1) 1号住居址遺物出土状態



(2) 1号住居址遺物出土状態



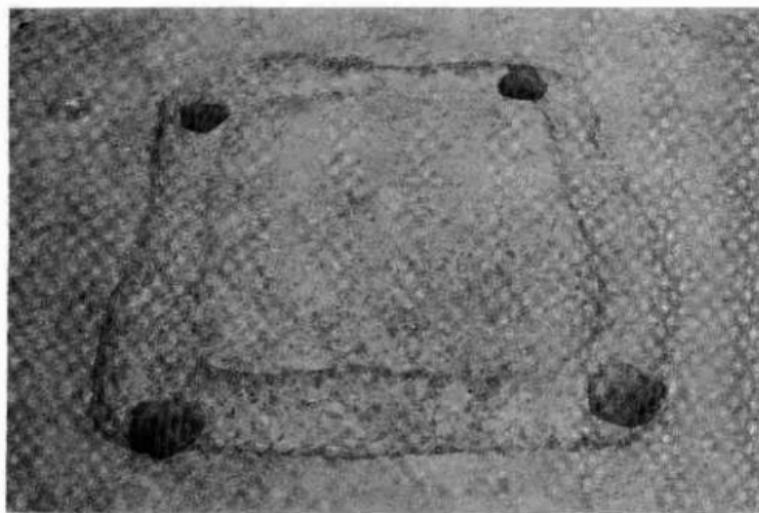
(1) 1号住居址 (南方より)



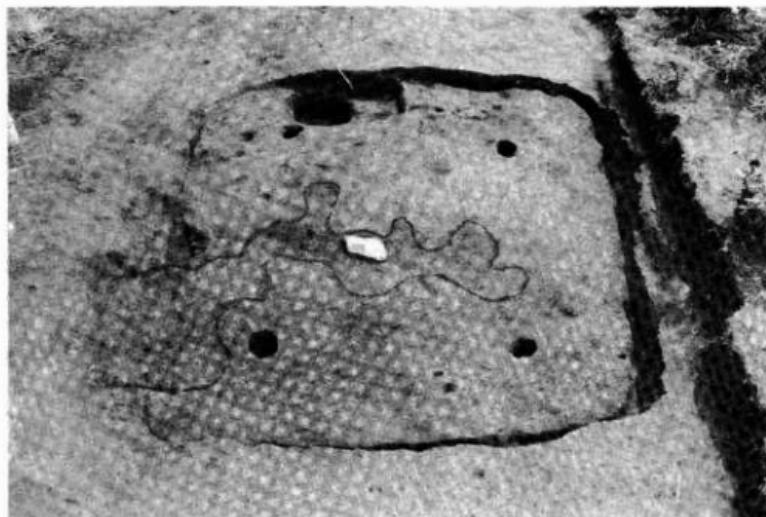
(2) 1号住居址 土堤状遺構と方形竪穴



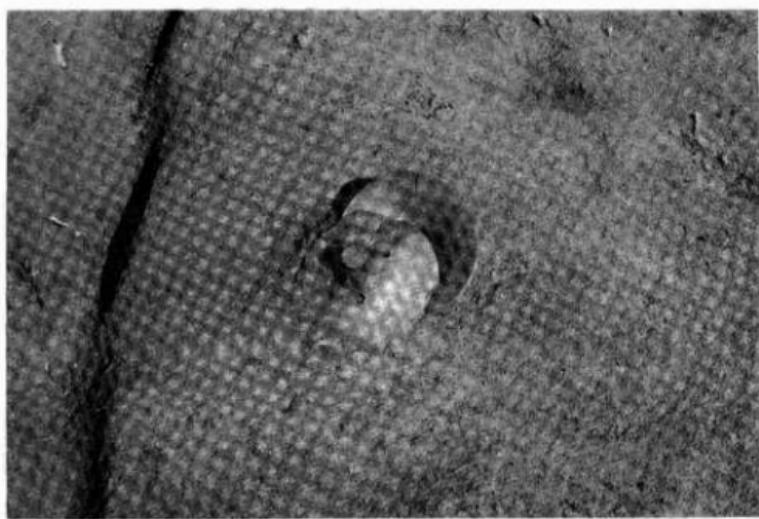
(1) 2号住居址（南方より）



(2) 3号住居址（南方より）



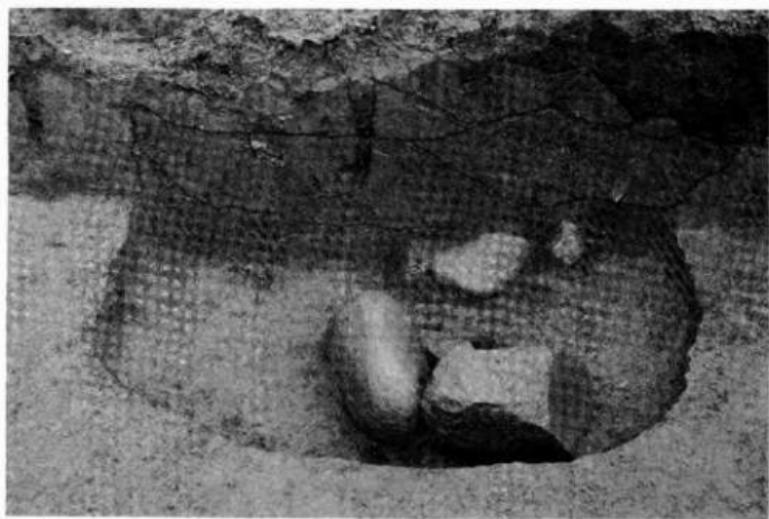
(1) 4号住居址（北方より）



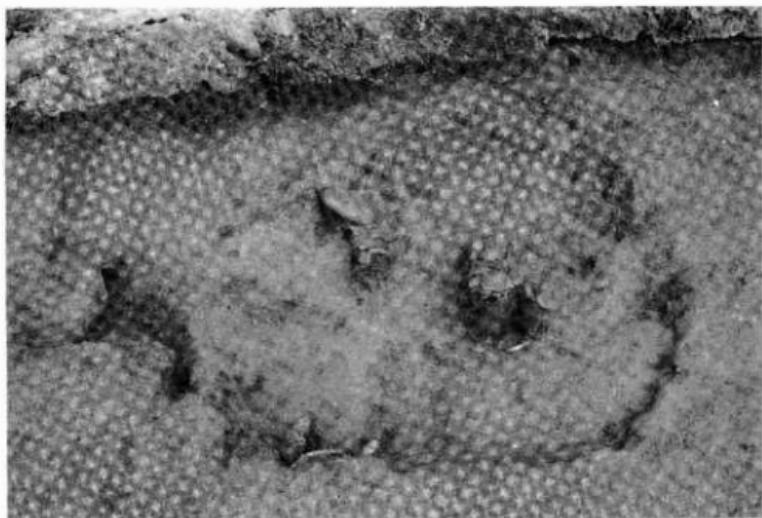
(2) 4号住居址遺物出土状態



(1) 1号土塁（北方より）



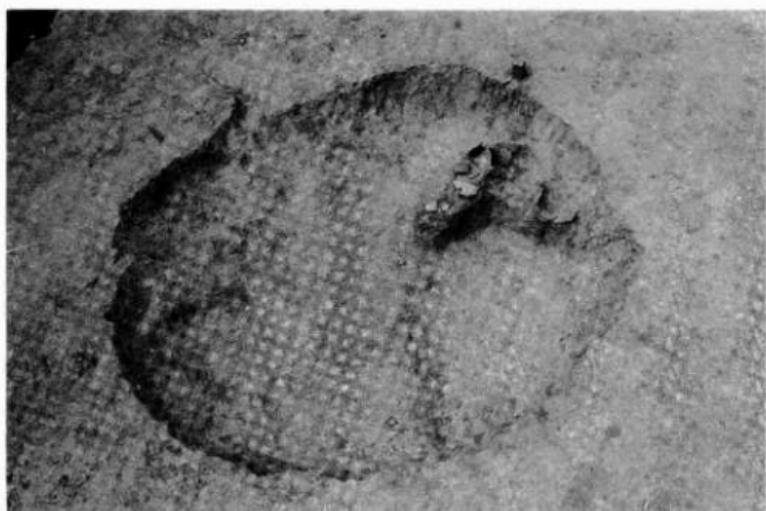
(2) 2号土塁（東方より）



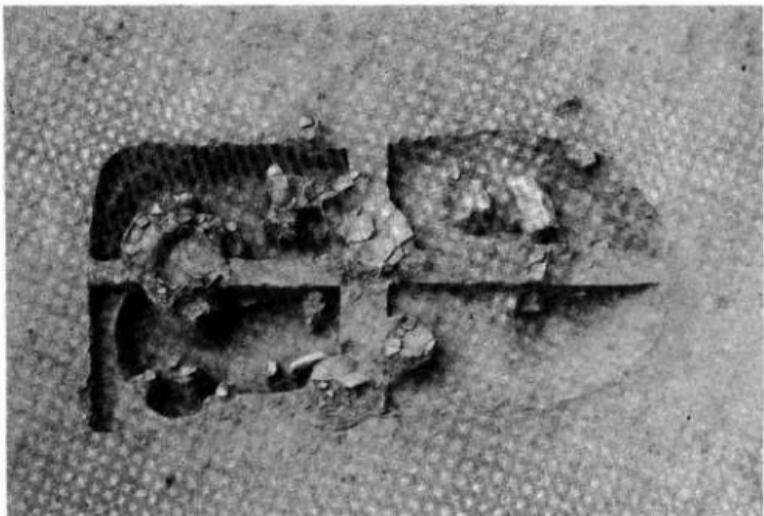
(1) 3号土塙（西方より）



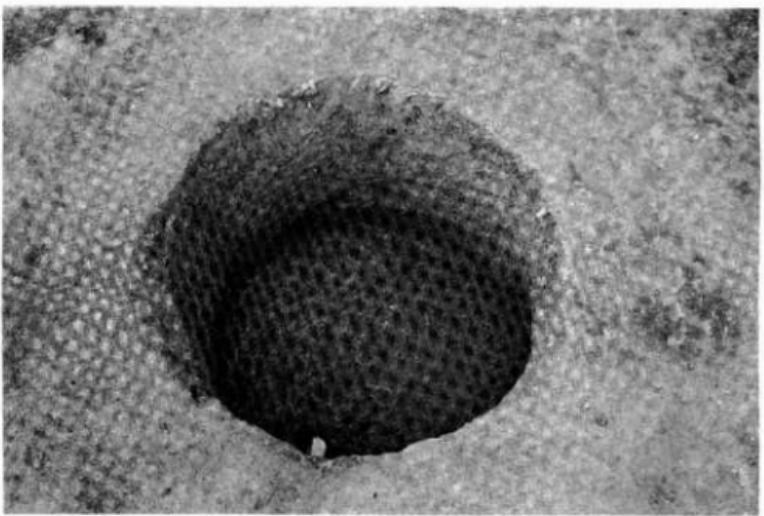
(2) 3号土塙遺物出土状態



(2) 5号土塊（西方より）



(1) 5号土塙遺物出土状態



(2) 6号土塙(南方より)



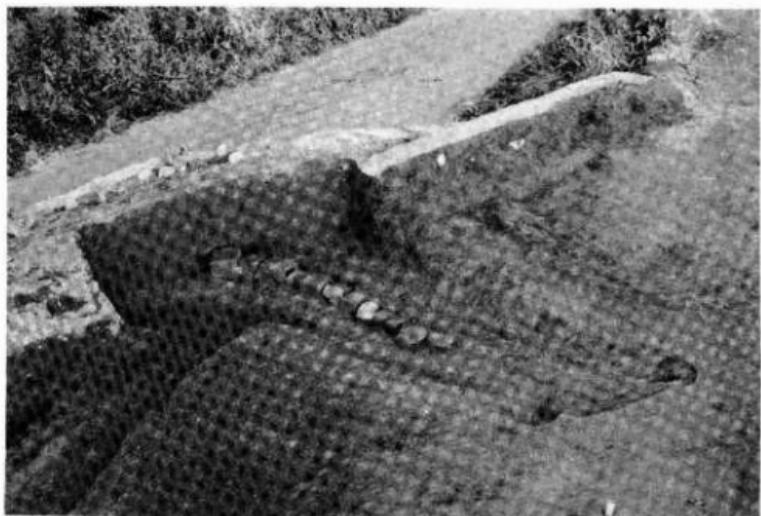
(1) 1号溝（南方より）



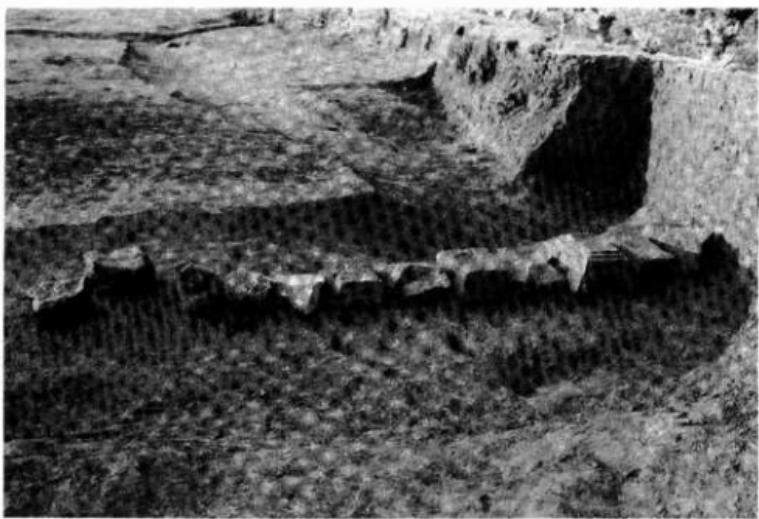
(2) 1号溝（北方より）



(3) 1号溝打製石斧出土状態



(1) 4号溝と石列（西方より）



(2) 石列（南方より）



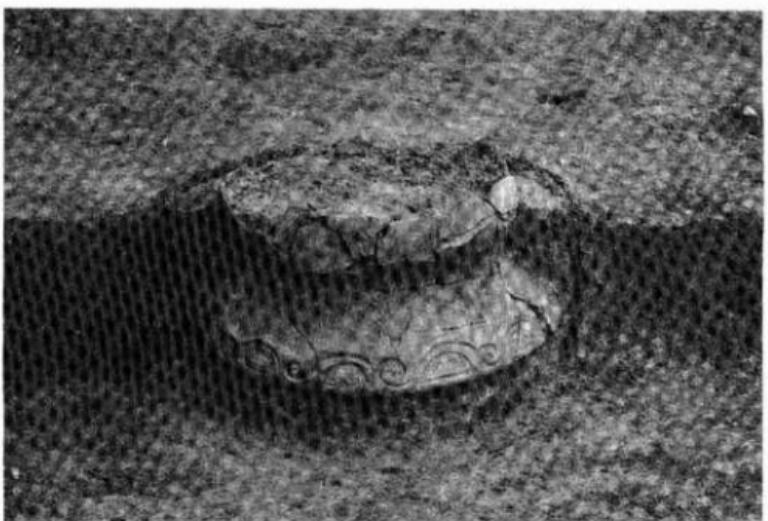
(1) 6号溝（南方より）



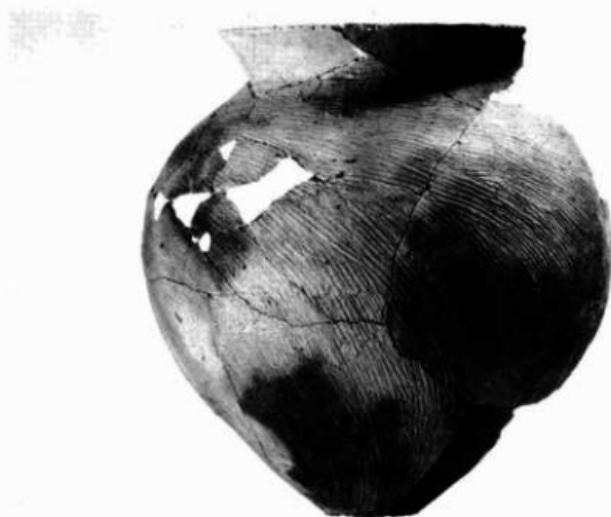
(2) 6号溝（北方より）



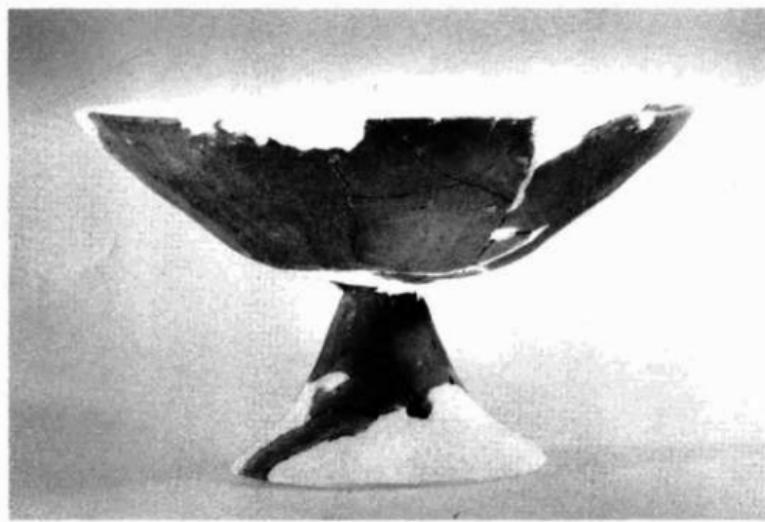
(1) 1号埋設土器埋設状態



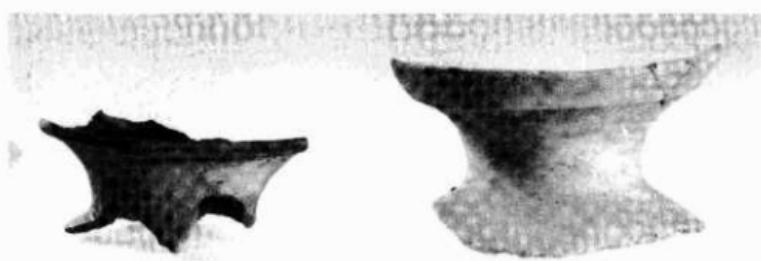
(2) 2号埋設土器埋設状態



(1) 1号住居址出土土器 (罐)



(2) 1号住居址出土土器 (高杯)



(1) 1号住居址出土土器（壺）



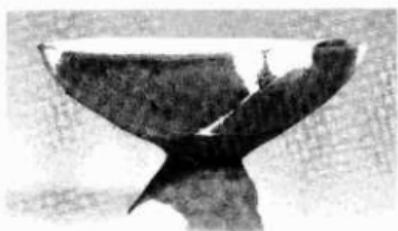
(2) 1号住居址出土土器（S字口縁甕）



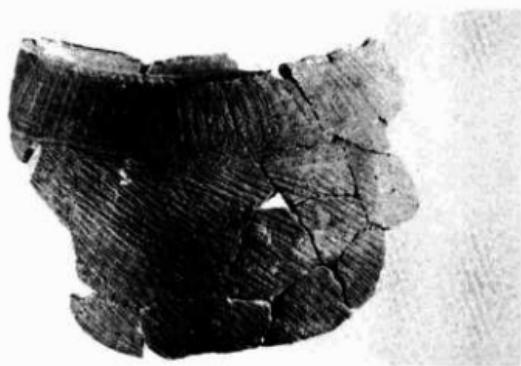
(3) 1号住居址出土土器（S字口縁甕）



(1) 1号住居址出土土器 (小型甕)



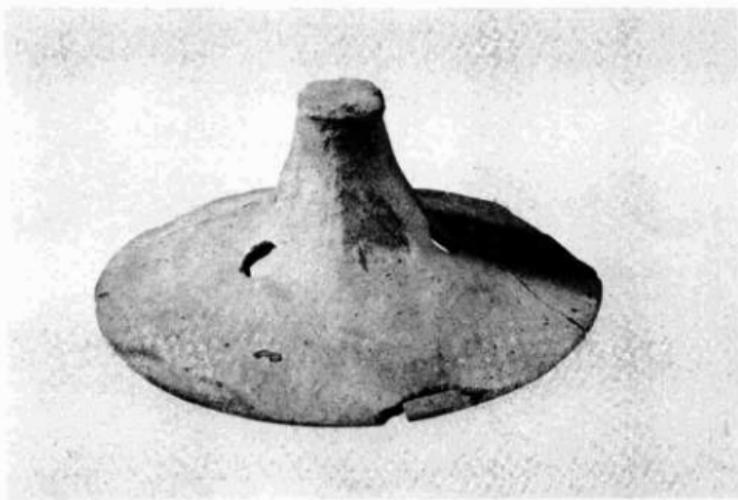
(2) 1号住居址出土土器 (高杯)



(3) 4号住居址出土土器 (S字口罐)



(1) 4号住居址出土土器（蓋）



(2) 4号住居址出土土器（高杯）



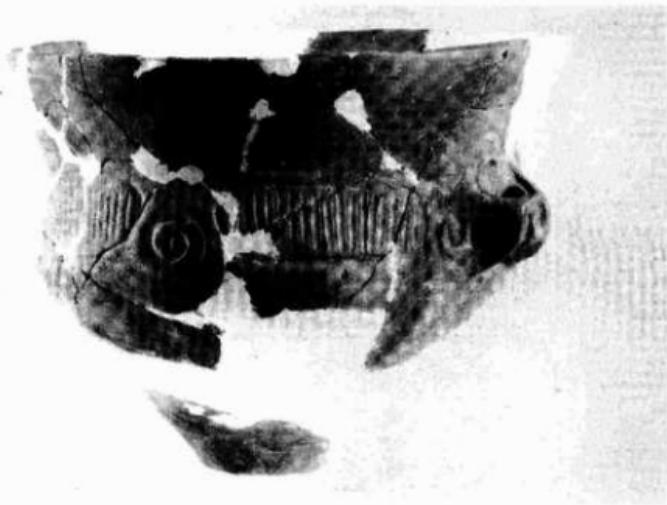
(1) 1号土址出土土器



(2) 3号土址出土土器



(1) 5号土塚出土土器



(2) 5号土塚出土土器



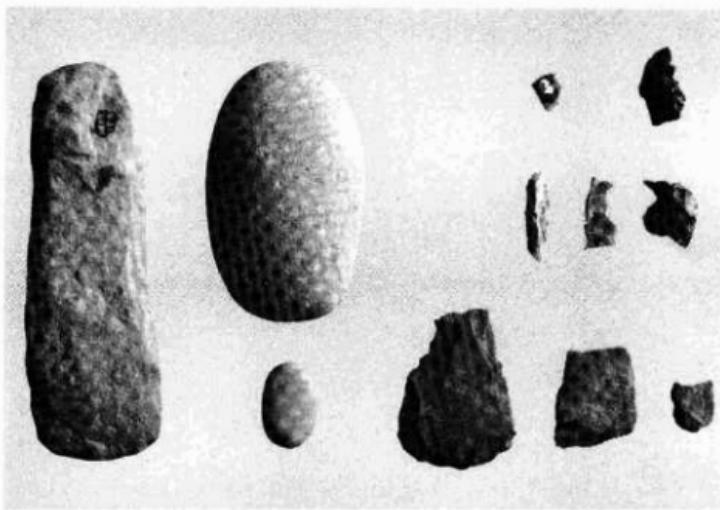
(1) 1号埋設土器



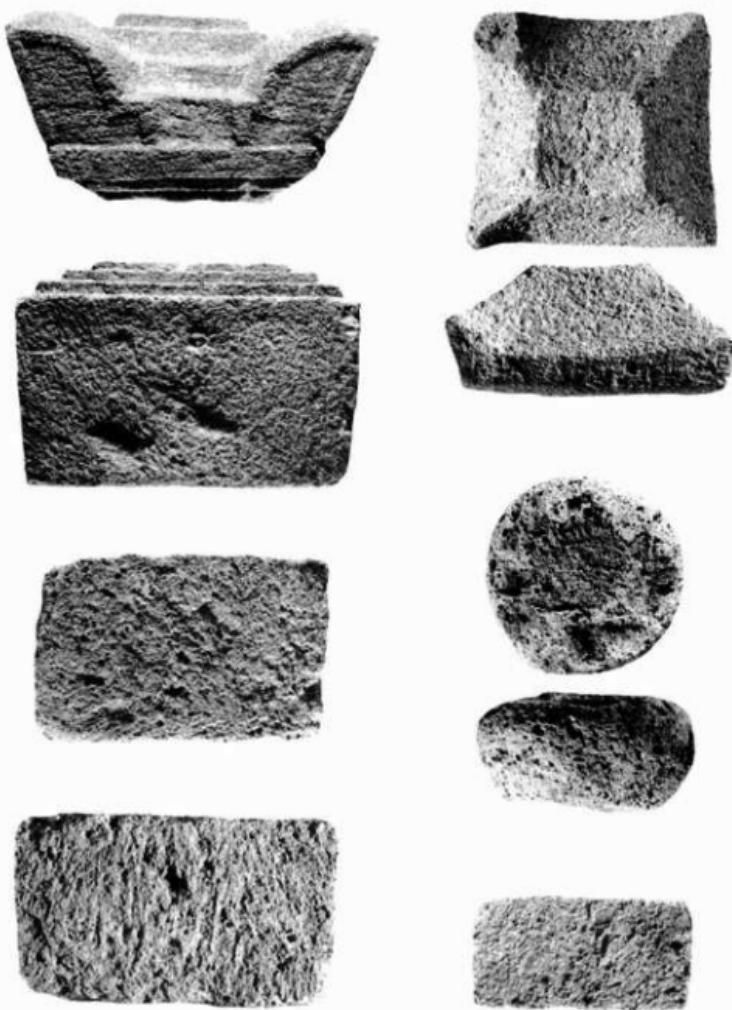
(2) 2号埋設土器



(1) 5号土坑出土土偶



(2) 石器



4号沟出土石塔

昭和59年3月25日印刷
昭和59年3月31日発行

山梨県韮崎市

久保屋敷遺跡発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会
印刷所 まいづる印刷
甲府市相生2丁目14-8
TEL(0552)-35-5723

